№645/XXIV.

鐙田淵海著

宗教汎論 完

京都 顯道書院

像

序

將軍朗

鎌田淵海君一日其著する所の宗教
汎論を携へ來て余に示して曰く將
に世に公にせんとす意見あらはえ
を聞かんと後數日君復來り訪ふ余
已に一讀す乃ち之を返し且謂て曰
く此冊内外に亘り眞俗二通し論す
る所頗る弘く益する所少からず但
字句の如きは精錬を欠く者あきに

非すと雖遽に活刷に附し以て世に
問んには如かず從來邦人の著書を
公にするや率ね鄙重に過く誤を傳
るを恐るゝは好すへしと雖時期を
失するを免れす自ら他の指教を受
るを得す亦他を啓發するゝとなし
方今邦刷の器械大に備り迅速の開
に供す復昔日梨棗に鏤刻して年月

を消費するの此に非す則今日の著
書を公にするは稿議案を議場に提
出するか如し讀者或は賛成を表し
或は修正を加へ以て完全の議案と
為すゝとを得今君の沉論世上或は
評多の修正を加る者あきを保せす
君宜く其議する所を聞き捨つへき
を捨て採るへきを採り刪補以て再

版に附して可なりと曉田顯道書院之を印刷するに方り序を余に求む余畏に君に答る所を書して責を塞くはと此の如し

明治廿四年二月一日　榕陰文室に於て

連城記す

目次

緒論

第壹章　宗教の必要　一丁

第一節　人性と宗教の關係　四丁

第二節　社會と宗教の關係　六丁

第三節　國家と宗教の關係　十六丁

第二章　宗教の性質　廿二丁

第一節　信仰するに足るべき目的物を指示するを要す　六十三丁

第一段　耶蘇教の目的物　六十九丁

第二段　佛教の目的物　七十一丁

八十九丁

第二節　現在未來に於て安心せしむるを要す　百十一丁
第一段　耶蘇教の安心　百十四丁
第二段　佛教の安心　百十五丁
第三節　現在未來に於て無限の快樂を與ふるを要す　百三十九丁
第一段　耶蘇教の快樂　百四十二丁
第二段　佛教の快樂　百四十四丁
第三章　宗教の目的　百四十七丁
第一節　耶蘇教の目的　百四十八丁
第二節　佛教の目的　百五十二丁

第四章　目的に達する手段　百五十九丁
第一節　耶蘇教の手段　百六十丁
第二節　佛教の手段　百六十五丁
第一段　難行道自力門　百六十七丁
第二段　易行道他力門　百六十九丁

已上

宗教汎論

鎌田淵海 著

緒論

眼を東洋の現情に放ち心を我邦の大勢に注き熟當時人心の傾向する所ろを案ぜるに智力に富むで感情に乏し舊慣を脱して新奇を慕ひ換言すれば宗教的の志想を脱して將に學術的の觀念に入り因襲的の時代を去て將に革命的の世界に移らんとするは實に今日の大勢なり此の時に當りて感情最も深く因襲最も久しき宗教の議論を提出するは恐らく枘鑿相容れざるの譏を免るゝ能はざる歟に現今を推して遠く將來を察せば天に仰き地に俯し悲憤慨嘆自ら堪ゆざるものありて予が短才

薄識を顧みるに暇まあらざ敢て聊か卑見を吐露し世の有縁の識者や之れが研究を試みんや欲す固と辨を好むにあらざ蓋し又止を得ざるに出るなり

近頃説をなす者あり曰く宗教は愚民を籠絡するの器具にして暗黑時代の治世策に過ぎざるものなれば開明の今日に至ては復た其の必要を見ざと又曰宗教は社會の發達を防關し國民の福利を減殺するものなれば須らく撲滅せざるべからざや之を要するに一は消極的より宗教の不用を論じ一は積極的より其の弊害を恐るゝに出ると雖是れ皮相の謬見にして未だ以て尅實の論となすに足らざ何を以て之を云ふ乎曰く論者は未だ其の人類の本性や如何なる關係あるか國家の興亡や如何なる關係あるか社會の道德や如何なる關係あるか而して又東西両洋の宗教果して如何なる軒輊あるかを究めざ僅に愚僧の講談を立聽し翁媼の感泣を目擊し總合一括して匆卒に此の謬見を懷き彼の妄論を唱ゑ以て社會の秩序國家の獨立を毀損することを省みざればなり

夫れ人心の同じからざるは猶其の面の異なるが如く嗜慴好惡各一ならざれば其の信仰の有無は固より各自の志想に放任して强ふべきにあらざ且つ强ふるを欲せざるは宗教の本性なるが故に其の信否の如きは豈に余が是非する所ならんや然ると雖其の國家に及ぼす利弊社

會に來たす得失に至ては重且つ大なるものなれば苟も國民たるもの、雲烟過眼視すべきものにあらざる況んや未弊の皮相を認めて舜犬堯に吠るの謬見を懷き其の全體を排斥するが如きは抑も日本男子の本色にあらざるおや

余は此等皮相論者の蒙を啓かんが爲先づ第一章に於て一般宗教の必要を論じ第二章に於て其の性質を說き第三章に於て其の目的を究め第四章に於て此れが手段を辨じ以て全編を結ばんと欲するなり

第一章　宗教の必要

茲に人類あれば茲に必ず各自信仰の宗教あり茲に社會あれば茲に必ず國家固有の國教あること古今萬國幾んど其の規を一にするものは何ぞや蓋し其の人類にあるや安心立命の基礎となる其の社會にあるや道德の淵源となる其の國家にあるや獨立の精神となること猶家屋の棟梁柱石に於けるが如き關係あるを以てなり若し夫れ棟梁腐朽すれば家屋必ず茲に倒れ柱石破損すれば家屋又必ず茲に全きこと能はざるなり爰を以て自己の安心立命を期するものは歸教信仰して以て其の恐怖を去て社會の秩序を維持せんと欲するものは是に藉て其の道德を涵養し國家の隆盛を希ふものは是に藉て其の元氣を養成

するは實に古今の常數なり請ふ已下三節に於て之れが關係を論ぜん

第一節　人性と宗教の關係

凡そ何れの世何れの時代と雖百事悉く明了に其の由來を訊ね万物悉く詳細に其の原理を究め終に一點の疑惑かからしめんと欲するも得て期すべからざるは活動社會の常態なり夫れ然る未だ疑惑の全く去らざるものあり豈に恐怖の心之に附帶して發生せざるを得んや之を孤客が暗夜枯木に遇ふに譬ふ其の未だ枯木たるを知らざるが故に魑魅と訝かり犲狼や疑ひ踟躇逡巡進まんと欲して進む能はず退かんと欲して退く能はず胸懷轉た

恐怖に堪へず全身粟を生じ冷汗背を浸すものは豈に疑惑に附帶する恐怖心にあらずして何ぞや恐怖既に發生す誰れか之を去りて安樂の地位に立んことを欲望せざるものあらんや然れば則ち疑惑と恐怖と欲望の三者は實に人類固有の普通性にして永く離るべからざるものなり而して其の疑惑を永解し恐怖を去り欲望を滿さんには宜く如何なる方法を用ゆべき乎是れ實に人性上宗教の已むべからざる所以にして又宗教の淵源となるべきものなり之を古今に徵するに蓋し古代の原人は推理の志想猶少なきが故に天下の事物一として怪訝ならざるなく不可思議ならざるなし混々流れて止まざる江

河を見ては是れ必ず人類の思議すべからざる有力者あり
て之を司るものならんと訝かり暴風の瓦礫を飛ばす
を見ては是必ず吾人の目擊すべからざる全能力者あり
て此の行爲を示すものならんと想像し都て天地の變動
山川の災異を以て一に之を神爲に歸して恐怖自ら禁ぜ
ざる者あり是に由て災禍を免れ恐怖を去り安樂の地位
に立んと欲するよりこ此等事物を尊奉供養するに至るは
自然の勢ひなり是れ之れを疑惑最も卑近にして恐怖最
も盛んなる多神教の時代と云ふ
降て中世に至り文明次第に開け推理の志想漸く進んで
太古の萬神は其の假面を剝奪せられ古代の雷神は下り

て音信の脚夫となり地神は變じて地質學者の材料に供
せられ水神は化して轉車の役夫となり風神も亦滊船艦
隊の往來に使用せられて水夫と伍するに至れり人智の
進歩豈に又恐るべきものにあらずや之を太古の原人に
比すれば其の差霄壤も啻からざるなり萬神存在の疑惑
是の如く既に氷解し去りたりと雖又一ケの新疑を生ぜ
るに至れり何ぞや曰く日月の運行草木の榮枯動物の生
死古今其の軌を守り整然紊れざるを觀して是れ必ず宇
宙の大創造者即ち上帝ありて此の巧妙なる天地を作爲
せしものならんと想像し隨て宇宙の料理萬物の主宰人
事の監督擧て上帝の意にありとし之に背けば罰あり之

に從ゑば賞ありと信ぜるもの是れなり是れ之を疑惑稍
去り恐怖稍衰ゑたる一神教の時代と云ふ
次に文化愈開け智識益進むに從て嘗て尊奉極りなき上
帝も哲理の原則は其の詐僞を告發し宇宙の眞理は其の
妄誕を捕縛して學理の公庭に引き出せしかば幾んど其
の馬脚を露はし僅に其の餘命を愚俗の習慣に維持し腐
敗の暗室に呻吟するに至れり試に彼れが巢窟たる歐米
今日の大勢を觀察すれば蓋し思ひ半ばに過ぎん但學術
上の觀察は之を次章性質を論ぜる下に讓り今先づ實際
上より其の如何なる待遇を受けあるやを陳述せん
一神教國の習慣として一業を起し一事を決せんとする

に當ては公事と私事とを問はず都て善惡正邪の標準を
上帝に取り先づ之に宣誓せざるはなし爰を以て彼の國
會議員法に於ても其の選出議員は必ず上帝に對して宣
誓せざるべからざることゝなせり然れども文明の進歩
は此の壓制を容れずして有名なるベンザム氏が一度び
廢宣誓論を唱道せしより爾來同氏の議論最も盛大とな
り上帝に對する宣誓の成文は幾んど空文に屬せんとす
るは歐米今日の大勢なり其の僅に儀式を存するものあ
るを見るも是れ强ち上帝に對する宣誓にあらずして自ら
良心に對するの誓言なり彼の英國政府が千八百五十四
年を以て保証公言の條令を發し以て異教の信徒に誓は

しめ次で約束公言なるものを布きて以て無宗教者の良心に約せしむることを許すに至りたるものは蓋し上帝の勢力既に地に落ちたるの實証ならずや又彼の千八百七十三年を以て有名なるジュテカナカルの條令を發し裁判所の構成法を改正して宗教裁判所を廢して上等裁判所の管轄に歸し人民の結婚生死に關することをも敢て上帝の支配に歸するを要せずして各自の意志に放任したるが如きも亦其の實証と云ふべきなり蓋し朦昧の時期に當てゝ妖怪魑魅天下に横行して能く人心を眩惑し跋扈至らざる所なきも眞理の大陽燦然として東天に昇るに至らば復其の足跡を止むるの餘地なきは自然の勢

ひなれば上帝今日の零落は固より深く異しむに足らざるなり是れ之を疑惑大ゐ衰へ恐怖大に減したる無神教の時代と云ふ

然れば則ち此の時代に方りては又更ゐ宗教の必要を感ぜざる乎曰く然らず百事の疑惑未だ全く去らざるが故に宗教の必要なる固より言を俟たざるなり何を以て之を云ふ乎曰く如何に理學の進歩することあるも如何に哲學の發達することあるも人智限りありて萬物限りなし限りあるの人智を以て限りなきの萬物を窮め限りあるの腦力を以て限りなきの事物を曉らしめんとするも到底及ぶ能はざるが故に疑惑の淺深厚薄は時代により

て變遷することあるべしと雖其の全く氷解せざるに至ては敢て異なるとなきなり試に泰西哲學の進歩を見るに甲疑去りて乙惑起り乙惑滅して丙迷生じ丙迷散じて丁難來り遂に不可知的に至りて其の足を止めたるにあらずや假令后世の大家能く此の不可知的をして可知的たらしむる者あるや雖焉そ知らん第二の不可知的又發生することあるを然れば則ち人類の疑惑は遂に全く其の痕跡を絶つ能はざるべし既に其の痕跡を絶つ能はざとせば此疑惑より生ずる恐怖猶遺存するありて此の恐怖を去り安樂の地位に還せんとする欲望の止む能はざるは人性自然の勢ひなり然り而して此の欲望に應じ其の恐怖を去らんとするには如何なる方法によるべき乎是猶宗教の力を假るにあらずんば能はざるなり由是觀之人性上宗教の已むべからざるは野蠻と開明とを問はず古今に通ずる一大法則や云はざるべからざるなり客あり來り問て曰歐米に於ける一神教の勢力は依然やして其の威名を保ち文化の發達と馳併して文明國の國教たるに愧ちざること誰れか爭ふものあらんや上來の陳述大に事實に反するもの、如しと其れ然り豈に其れ然らんや其の彼れが歐米に名望あるは宗教本來の名望ゑあらずして政畧上の必要より一時利用せられたるに過ぎざるのみ故に彼れ一神教は發達するも宗教發達の

順序にあらざ彼れが名望を得るも宗教本分の名望にあらざ而して其の國に盡す所の功用も宗教本分の功用にあらざ社會に及ぼす所の感化も宗教本分の感化にあらざるなり余が上來の陳述は純ら宗教の本性よゝ論究せしものなるが故に此の相違あるは又異しむに足らざるべし乞ふ已下耶蘇教に關する條項に就て參考せよ

第二節　社會と宗教の關係

夫れ社會の成立するや固と是れ個人相互の安寧幸福を求めんが爲め自然に勞を分ち職を異にし唇齒輔車の關係とり生ずるものなるが故に强は弱を扶け賢は愚を導き苦を分ち樂を共にするの公義に賴らざんば社會の幸

福得て期すべからざる者なゝ然れども人類普通の本性として自愛に深く他愛に淺きものなるが故に其間自然に爭鬪の起らざるを得ざ之を生存競爭の天則と云ふ若し夫れ此の天則に放任せば搏擊呑噬弱肉强食の慘狀を呈出し滔々たる天下修羅街頭たらざんば禽獸社會たらんこと必然なり此時に當り能く其の擾亂を治し爭鬪を平げ社會の秩序を料理せんと欲せば必ず宗教の力らに賴らざんば能はざるなり何を以て之を云ふ乎曰く人類固有の性質として普通に存するものは宗教志想なること前節既に之を陳べたり此の故に都て宗教の感情は深く衆人の心裏に薰染して戰國爭亂の日と雖容易に其の勢

を減ぜるものにあらざ若し此の勢ひに乘じ威を神佛の天啓に假て爭鬪の賤しむべく人倫の重んぜべきを說くものあらば天下靡然として之に歸するこそ恰も峻坂に車し上風に火するが如く一朝にして能く其の爭鬪を和解し社會の秩序を整備することを得べきなれど暫く之を耶佛二教の起原に徵するに耶蘇教の始めて猶太に起るや當時羅馬帝國の專制最も甚しく內訌四方に起り風俗の壞亂人心の腐敗幾んど其の極度に達し復た之を濟ふの術なきに至れり適々耶蘇基督なる者猶太に起り上帝を崇び他人を愛し自己を潔くするの三事を以て教を立て之を守れば天國に昇り之に背けば地獄に墮すべしと

說き大に世人の信用を博し一時既壞の道德を醫せしものは其の効僅少ならざるなり又佛教の始めて印度に起るや當時狗尸那國、遮羅國、羅摩國、摩竭提國、迦毗羅衛國、等の列國の爭鬪最も烈しく人心恟々生を聊せざるに際し釋迦佛起て大喝一聲轉迷の開悟妙理を說き五戒十善の道義を教ゑ塗炭の人類を既溺に救ひ公義道德の標準を立てたるは實に万世の幸福と云ふべきなり蓋し佛教の目的は轉迷開悟にあて社會の調和にあらざと雖其の目的を達するの手段は不知不識國亂を醫し爭鬪を靜め公義道德の標準となるものなるが故に苟も人類社會に於ては一日も欠ぐべからざるものなり論者曰宗教と道德とは

二者各々獨立するものにして宗教は未來の迷悟を諭とし道德は現世の修身を教ゆるを以て本分となすものなれば蒙昧時代に於ては宗教によりて道德を維持するの必要あるも開明の今日に於ては道德を維持せんとするには復た何ぞ宗教に頼るの必要あらんやと嗚呼何ぞ誤れるの甚しきや宗教と道德とは本末の關係あるものにして道德の宗教に於けるは猶水の淵源に於けるが如し淵源なきの水流は忽ち流れて忽ち止み遂に又涸れんのみ古語に曰原泉混々晝夜を舍めずと是れ淵源ある水流の壯なるを云ふなり夫れ宗教に依らざるの道德は其基礎堅固ならず昨是今非未だ一定の本義を確認すべからず

して遂に其の標準を失し其弊や初めより之れなきに如かざるあるべしと雖宗教に依るの道德は其基礎堅固万古不易にして世人をして亦五里霧中に彷徨せしむるの患ひあることなし且又宗教にとらざるの道德は之に背くも僅に社會の制裁に止りて主權者の刑罰なきが故に衆人稠坐の中にあらざるよりは其の獨を慎み屋漏に愧るの君子は蓋し幾んど之れなしと云ふべし之に反して宗教によるの道德は未來の制裁あるが故に孤獨猶善を修め單身猶惡を慎まざるなきなり是に由て之を觀れば智識は如何に發達するも才能は如何に進歩するも宗教の感化によらざるの智識は眞の智識にあらず宗教の感化

にとらざるの才能は眞の才能にあらざるして智識の利用は猾智と變し才能の作用は瞞着と化し陰險詭譎表裏反覆口に義膽を談し筆に忠肝を議し正々堂々天下の老將を以て自ら任ずるが如き者も一利の眼眸を遮ぎるあれば忠肝義膽は忽ち雲散霧消して復其の痕跡を遺さゞるに至るは是れ實に宗教によらざる僞道似德の弊害にして又今日文明國一般の惡風なり豈に慨嘆に堪ふべけんや是れ余が宗教を以て道德の中心となし社會に一日も欠ぐべからざると云ふ所以なり猶詳細なることは下第四章宗教の目的を達する手段に讓らん

第三節　國家と宗教の關係

宗教自身の特性は國家的のものにあらざるして社會的のものなり固着的のものにあらざるして圓滑的のものなり澁滯的のものにあらざるして流動的のものなるが故に其の教足固なり一國片州に止まることを欲せざる又之を止むることを欲せざるは宗教家の本分なれば國教の設置は望むべきものにあらざると雖若し地位を換て政治家の資格を以て之を觀れば政畧上の必要なり宗教自身の特性を曲げ法理の原則に反するにも拘らず國教を設置して相當の保護を與ふること古今萬國幾んど其の規を一にするものは何ぞや蓋し古來萬國の治亂興亡は其の原因國教の盛衰汚隆に錯ることと最も多きに居ればなり請ふ且

らく古今に渉りて之を尋ねん

古代に泝りて歐洲各國の當時を觀察するに大概朦昧野蠻にして確乎たる國体の成立を認むべきもの甚だ稀なるが故に正史の確實なるものを發見すること能はざと雖歐洲最古の希臘國の如きは基督の出生を距る凡そ八百年の前日に於て獨立の國體既に成立し富强四隣を壓して四百年の長きに及びたるこそ爭ふべからざる事實なり其の富强如此他邦に先んじ其の獨立如此永久に渉りたる原因を尋ぬるに天然の地勢自然の水利大に與りて力らありと雖國教の盛大なりしもの其の過半に居らざんばあらざ抑も希臘國の地勢たる半島々嶼甚だ多く

港灣處々に出入し山嶽國中に起伏して自ら全國を數多に分割し隨て數多の小獨立國を成し分裂割據の有樣なるが故に此等諸邦の間猜忌絶ゆることなく爭鬪休む時なしと雖勇悍虎狼のヘルシャ兵の侵入を防ぎ能く全國の獨立を維持せるものは主として國教の盛大に職由せざんばあらざ何となれば全國の地勢如此分裂し國内の爭鬪如此烈しと雖「ジュピター」(我國の國常立尊に於けるが如き大祖の神なり)を信奉するに懇篤なるに至ては全國同一にして宗教上の親密なること未だ嘗て他國に其の比を見ざる所なり爰を以て一朝異教國民の侵入するとあらば平素の仇怨を後にし私人の猜忌を忘れて諸

邦互に一致團結し奮起勇進身を以て之に當りたるものは蓋し愛國の精神より寧ろ異教の蹂躙を惡むの情强きに居るが故なり夫れ蛇にあらざれば蛇道を知らず宗教信者にあらざれば宗教の甘味を知るとなし國家の難事に死を厭ふの懦夫も宗教の危急に生を欲せざるは宗教信徒の特性なり彼の羅馬のピーター一席の演說は能く歐洲耶蘇教國の人心を感動し百萬の生命を十字の軍頭に屠りたるの事を以ても知るべきなり希臘國民如何に剛毅なるも如何に勇悍なるも宗教の熱情あるにあらざんば焉ぞ能く虎狼百万のヘルシャ兵に敵し四隣蠻族の來襲を防て獨立の永久如此なるを得んや降て紀元前三百四十年の頃に當て宗教の信仰は全く廢し威靈なる神社は變じて青年男女の待合所となり嚴正なる宮殿は化して宴會の舞蹈場となり人心一般に腐敗して又昔日の公義道德を顧みざるに至りしは是れ即ちマセドニヤ王「フヒリップ」カケエロニヤの一戰に於て能く此の國の獨立を破壞して全勝を得たる一大原因なり是に由て之を觀れば希臘國獨立の富强は國教隆盛の花實にして又其の滅亡の末路は國教の廢頽の事蹟と云ふも敢て過言にあらざるべし

降て中世の歷史を繙き羅馬帝國滅亡の前後に當り數多の獨立國を捌造せし英雄豪傑の手段に徵するに一やし

て宗教の力らを假らざるはなし就中サラセン帝國の鴻業の如きは其の最も顯著なるものなり請ふ其の由來を說かん

サラセン人が亞細亞。亞弗利加の二大洲に跨がりて一大帝國の基礎を揑造し七百年間の王統を繼續して基督教國の人心を寒からしめたるものは是れ全く其の王統の鼻祖「マホメット」が宗教の革命を唱道せし結果と云はざるべからざ抑も「マホメット」は性質明敏敢爲にして正直履信の君子なり其の初めて宗教の革命を唱道するや應援甚だ多からざと雖門人次第に繁殖し晩年に及んでは信徒の歸向愈盛んにして「マホメット」の爲に死を盟ふもの万を

以て數ふるに至る茲に於て其勢ひ破竹の如く遂に王氣の基礎を揑造せり「マホメット」の死するや「カリフ」位を繼ぎ「マホメット」の遺志を受け政教の兩權を掌握し宣教を以て奪國呑噬の手段となし亞細亞。亞弗利加の兩洲を蠶食して遂に不拔の鴻業を立てたり然れども盛衰榮枯は古今の常數にして治亂興亡は天下の通理なればサラセン帝國亦此の常理に洩るゝ能はざして其の晩年に及び國教次第に廢頽し道德漸く地を拂ひ爭鬪乖離踵を接し十一世紀に至り七百年間の帝國を土耳其人とムール人種の爲めに奪はれたり是に由て之を觀ればサラセン帝國獨立の盛時も亦國教隆盛の花實にして又其滅亡の末

路は國教廢頽の事蹟と云はざるべからざる其他フランク王國の鼻祖「クロヒス」が「アレマン」族と戰ふに當り勝利を上帝の聲援に托し勇敢豪邁の兵士を鼓舞して偉大の功業を奏せしより南征北伐常に此の神托を利用し以て民心結合の手段となし王都を巴里に定め四方に雄飛したるが如き又「シャーレマン」帝が其の大志を達せんと欲し基督教の爲に死を盟ふナートン人の信仰力を利用して連戰連勝五十三回奪國併呑十二に及び歐洲全土を震動せしが如き又ゼルマン王國の「オート」一世が神聖羅馬帝王の稱名を得て基督教國を保護し基督教國の主長を以て自ら任じ其驥足を全歐に伸さんとしたるが如き又羅馬帝國の大帝「コンスタンチン」が帝國憲法の改正を企圖せんとして先づ基督教徒を保護し其の信仰力を保護せしが如き要するに宗教の威力を假らざして其の宿望を達したるもの未だ嘗て之れあらざるかり而して其の藉る所の宗教强大なるものは其の功業隨て偉大に其の藉る所の宗教微弱なるものは其の事蹟隨て僅小からざるはかし嗚呼宗教の威力豈又恐るべきものならざるや更に降て近世歴史に就て之を求むるに其の事實少なからざると雖且らく埃及國の近狀を擧て之を說かん夫れ埃及國が十九世の初めに當たり土耳其政府の羈絆を脫し一時富强を極め將に四方を圖らんとするの隆盛を呈し

たるものは何ぞや而して又其の富强久しからざるして今や國運將に盡き孤城落日の悲境に呻吟するものは何ぞや余を以て之を觀れば是れ全く國教の盛衰汚隆に基因せざんばあらざるなり

抑も埃及國中興の基礎を堅めたるものは「メヘメットアリー」氏にして氏が功業決して偶然にあらず元來埃及國は回教を以て國教と定めたり當時耶蘇教の侵入激烈にして國教信徒や軋轢すること最も甚だしく爭鬪幾んど踵を絕たざるしかば「メヘメットアリー」は夙に之を憂ひ常に耶蘇教信徒の跋扈を憤慨し機を得て大におすことあらんことを期せゝ適々土耳其政府の苛政最も甚しく人

心恟々たるに際し蹶然奮起國教恢復を以て自ら任じ普く回教の信徒を結合して外は土耳其の苛政を排し內は積習の弊政を洗ひ四十年間百難齎集の間に立ち能く埃及獨立の基礎を經營せり若し氏をして國教恢復の口實なくして獨り天資の英邁剛毅なるに賴らしめば人心を收攬すること豈に此の如きを得んや當時回教の信徒が氏を尊敬して教祖「マホメット」の再來にあらざんば救世主の出世なりと仰ぎたりしと云ふ氏が功業の過半は國教信徒の信仰力に藉ることを推知するに足るべし而して其の崩ずるに及んでや「アバス」位を繼ぎ能く「メヘメットの遺志を受け篤く國教を信じて民心を收攬せしを以て

國威愈盛大に趣きたり要するに此等二王の政治手段は主として國教を利用し此の功業を奏したるものゝ云はざるべからざるなり後ち「イスマイル」王の世に至て耶蘇教の侵入愈々甚しく人心全く腐敗して國運將に一髮千斤を引かんとするに當り蓋世の英雄「アラビッ」公なるゝの慨然奮起して國民黨の主領となゝ怯懦の農民を夢死の中に攪起し百萬虎狼の歐軍に敵し滔天の怒浪を排し一時獨立を維持せんとせしが如き是亦宗教の力らに籍れり其の初めて起るや國教信徒に檄して曰く「天を拜するものは來れ神を拜するものは來れ耶蘇教信徒の跋扈を惡むものは來れ國教の恢復を希ふものは來れ我れ

盟て耶蘇教を倒し國教を興さんと」茲に於て國教信徒死を盟ひ一致團結して「アラビッ」公の軍伍に入りたりゝ云ふ「アラビッ」公の運動亦國教信徒の信仰力を利用せたゝものなること知るべきなり而して其の南風競はざして遂ゐ錫蘭の孤島に呻吟するものは國教信徒の罪にあらざして衆寡敵する能はざるゐよるなり嗚呼亦惜かな

飜て埃及國今日の慘狀を現出せし由來を尋ぬるに遠く「サイト」王の時代に發せり王は國教を信ぜざるのみならず却て耶蘇教を慕ひ施政の方針一に歐洲に取りたれば大に人心を失ひ國内爭鬪を釀したりと雖未だ今日の慘狀を呈するに至らざりしも「イスマイル」王位を繼ぐに及び

國教愈衰ゑ耶蘇教愈盛にして道德地を拂ひ人心腐敗し自國の觀念を失ふもの少なからざるに至る彼の千八百七十五年を以て建國の大義に反するまゝ枸らぎ混合裁判所を設置し外人を法官に任用して內地干涉の端を開き遂に亡國の禍亂を招きたるものは果して何人の手になりしや是れ卽ち夙に耶蘇教に改宗して自國の觀念を失ふたる當時の條約改正委員長「ニューバル」候にあらぎや爾來此等本國に生れたる外教信徒陸續輩出して遂まる今日の悲境に陷入りたり若し埃及國をして異教の侵入おからしめば此の慘狀を見ることなかるべし嗚呼亦惜かゝる是に由て之を觀れば埃及國の富强は國教の盛大に基因し而して其の滅亡は異教の侵入に職由するものと云はざるべからざ是れ予が國家の治亂興亡は國教の盛衰汚隆に基因するが故に政器上の必要より國教を設置して民心を結合し精神を統一して獨立の基礎を固め國家百年の大計を議せざるべからざゝ云ふ所以なり而して予は特に方今我邦に於て最も其の必要を感ずることを轉た切ならざるを得ざ

熟方今我邦の現情を通觀するに浦賀一發の砲聲轟然として桃花源裏の酣夢を攪破せしより文學技藝其の他百般の事物悉く之ゞ歐米に伸き僅に二十有餘年にして幾んど出藍の譽を歐米に博せんゝせり忠君愛國の士誰れ

かゝを祝せざるものあらんや然まども退て其の所謂出
藍の内部を觀察すれば悲憤慨嘆に堪ゑざるものあり何
ぞや曰く我邦人徒らに彼れが浮華の文明に眩惑し彼れ
が空理の虛論に沈溺して眼に正邪の明を失ひ心に是非
の智を喪して本末を錯置し内外を轉倒し遂に彼れが尊
國慣用の術中に陷入りたることを知らゞ而して揚々自
得我は眞正の文明人なり我は開化の眞相を得たりやな
すもの實に少しとせゞ豈に悲嘆の至りならずや我日本
國民たるもの宜く今日に於て國教を設置し民心の歸向
する所を定め精神を一統せゞんば將に他日東海の表に
於て第二の埃及國を現出せんとす

答あり來り難じて曰帝國憲法第二十八條を案ずるに曰
「日本臣民は安寧秩序を妨げゞ及臣民たるの義務に背かゞ
る限り於て信教の自由を有す」と然れば則ち日本國民は
信教の自由を得たるものなるが故に佛教を信ゞるも可
なり耶蘇教を奉ゞるも可なり又更に無宗教なるも可な
り何ぞ國教を設置するの必要あらんや否な國教の設置
を論ゞるは憲法違反の罪人ならゞやと嗚呼何ぞ誤れる
の甚しきや國教の設置と信教の自由とは固より水火氷
炭の異あるものにあらゞ一方に於ては信教の自由を許
し一方に於ては國教を設置するの國制古來實に少しと
せゞ否な歐洲各國の現狀概ね然らゞるはなしゞ云ふも

過言にはあらざるなり蓋し信仰なるものは無形の意志に属するものにして統治主權の管轄已外のものなるが故に各自の信仰に一任して政府の干渉すべきものにあらざれば憲法上之れが自由を許すは文明國の定則なりと雖國政の必要上此の自由の範圍内に於て特定の一宗を撰擇し之を保護して民心の歸向する所を定め國家獨立の基礎を堅むるも亦各文明國政略上の通則と云ふべきなり論者は國教の設置を認めて國教已外の信教を禁止するものとなすが故に此の惑を起せるに外ならざ何ぞ憲法に違反するの理あらんや

容又日國教の設置は信教自由の範圍内に於てするものなるが故に憲法に違反せざるとは既に命を聽く然れども我國既に國教の設置あるはあらざや神佛の二道は我國の國教なること誰か之を爭ふものあらんや看よ我が官幣國幣の神社は即ち我國の宗廟社稷にして我が皇統國躰の根軸なるが故に政府は國帑を以て之を修造し官幣國幣を進めて之を祭祀し給ふ又我名藍巨刹は多くは歴代天皇の敕願に與ず或は皇族住持の門跡に係るが故に皇室は寄附金を下賜し政府は保存金を與ふて之を維持し給へり其の他府縣鄕村社とり一鄕一村の寺院に至るまで勝手に之を建立し自儘に之を廢毀するを許さざ是れ皆國家の宗祀にして神社佛閣は取るも直さざ國教

の殿堂なればなり又禮典の如きも元旦の四方拜より除日の大祓まで陛下御躬づから齋戒沐浴して天神地祇を敬祭し給ふ其の他官幣社の大祭には敕使を立て、敕祭せられ國幣社の大祭には地方長官を遣はして國幣を進めらる叡山の法華會三井寺の灌頂會東寺の御修法の如きも毎會に地方長官をして道場に臨監せしめ給ふ是れ國教の禮典なればなり又教師の如きも官幣國幣神社の神官は官之を命ぜらる、は勿論神佛二教の管長は敕を以て之を任ぜらる其の部下の教師末派の住職は各管長に委托せられたるが故に豫め内務省にて認定したる教規宗制にとりて之れが統轄をなさゞるはなし是れ神官僧侶は共に國教の職員なるがゆゑなる之に反して耶蘇教の如きは會堂の興亡も政府之に干渉し給はゞ耶蘇教の誕辰祭日にも政府之に一介の使命を賜はゞ宣教師の任免黜陟も政府之に貪着し玉はゞ是れ神佛二道は國教にして耶蘇教は異國の宗教なるがゆへなり今將た何を苦んで我邦國教の設置を論じて平地に風波を生ぜしむるが如きとをなすやと

其れ然り豈に其れ然らんや論者の所謂國教なるものは是れ國家の大典儀式にして予が所謂民心結合の國教にあらざるなり抑も民心を結合し精神を一統して國家獨立の基礎を鞏固にせんとする國教なるものは此等二三

の保護禮典の儀式に止まらざるして上は廟堂の大臣より下は小學教員等に至るまで苟も公務に奉ふる吏員は悉く之を國教信徒に擧げ又其の教育の如きも國教の主義によらざんばあらざ積極に消極に國教の盛大を扶け以て異教の手足を脆はめ其の蔓延を閉遮して自滅せしむるの手段を取らざるべからざ國教の國教たる所以茲に於て始めて存すと云ふべきなり今や神佛二道の我邦に於ける其の境遇果して如何ぞや堂々たる廟堂の大臣猶耶蘇教を贊成するものあり堂々たる議官猶基督教大學の後援をなすものあり堂々たる國民教育の學校猶耶蘇教の主義の教科書を用ふるものあるのみならざ論者の所謂國教主義の大臣は甚だ稀に國教主義の教科書を用ゆる學校は幾んど之れなきにあらざや論者は之を以て猶神佛二道は國教や看做し得るか予を以て之を見れば神佛二道は國家の大典儀式に止まりて名義は國教と云を得べきも其の實際は寧ろ耶蘇教にあるが如し(神道は國家の大典にして宗教の要素を具せざるが故に予は宗教やして之を論ぜるを欲せざ)是れ予が國教設置の必要を今日に論じて民心の結合を計り我が祖宗三千年の國家をして天地と共に窮まるからしめんと欲する所以なり我邦既に國教設立の必要を感じ而して未だ眞正の國教を認むること能はざること如此然れば則はち其取捨撰

擇は如何がすべき乎是即ち國家の盛衰興亡の岐る、所
以なれば宜く熟思審案せざるべからざ予を以て之を見
れば斷然耶蘇教を捨て、佛教を取らざるべからざるを
信ぜるかり請ふ其の理由を述べん
第一耶蘇教は歴史的の宗教にして我國の歴史を破壞す
るも佛教は之に反す
耶蘇教徒曰アダムイーブの二人は世界人類の祖先にし
て無數の人類擧て其の後裔たらざるはなしと又我建國
の歴史に依れば伊弉諾伊弉册二尊は此國を搬造し以て
皇祖天照大神に授け給ひしよゝ以來神胤連綿承繼して
遠く今上陛下に及び給ふり乃ち諾册二尊は實に我國の

夫祖にして唯皇室の祖先たるのみならず又我等同胞人
民が仰ぐ以て靈祖とする所なり是を以て我等人民が皇
室に對するの感情は恰も本來親子の關係にして他國は
所謂便宜上主權を委托すと云ふが如き輕薄なるものに
あらず是れ國體堅固皇運無窮にして三千歳の久しき史
上未だ曾て不吉なる事跡を遺さゞる所以なゝ然るに耶
蘇教の説くが如きは我祖先は獨りアダムイーブあるの
み我々人類はアダムイーブの子孫なるのみ此説たる到
底我歴史と両立せざるものかり是に由て此を信ぜるも
のは彼を信ぜること能はず彼を立るものは此を破らざ
るを得ず試に我國現時の耶蘇教信徒に就て之を糺さば

如何彼等の胸中唯アダムイーブの親むべきありて復た諸册二尊の崇むべきなし將た何に由てか皇室を尊敬して其の神胤と仰ぐことを得んや彼れ忌憚する所ありて遂く之を口外にせざると雖道理上推究すれば其の胸中一時に氷炭相容れざるの異說を信ずること能はざるや明らかなる然れば則は我國民にして一人耶蘇教の信徒となれば則ち一人我歷史を破壞し千人耶蘇教の信徒となれば則ち千人我歷史を破壞せりと云はざるべからず既に我歷史を破壞して自ら猶太國人の後裔なりと信ぜば是れ建國の基礎を搖かし尊皇の精神を奪ひ愛國の赤心を攪す者にあらずして何ぞや之に反して佛教は學理的の宗教にして歷史的の宗教にあらず即ち其の國の歷史に關せざるを以て世界處として適せざるなく各國往として益せざる莫し印度に發しては印度の國體を護り支那に傳ては支那の國體を護り日本に來りては則ち日本の國体を護れり是故に我國佛教の傳渡以來未だ嘗て建國の基礎を傾けず未だ曾て史上の光輝を汚さゞるのみならず寧ろ從て其基礎を堅固にし其光輝を發揚するの勳功あることは通史の人普く知る所なり

第二耶蘇教は我國の性格に適應せざるも佛教は之に反す

凡そ國家の成立たる各國相同じからず即ち國々事情の

異なるありて所謂一國の特性なる者を成せり從て人情風俗制度文物差異なき能はざ佛は佛の特性ありて能く佛たるを得獨は獨の特性ありて能く獨たるを得英米魯伊各皆其の特性ありて存す我國何ぞ獨り之れなからんや否開國以來數千歳四境海を以て圍み東西懸絶たて彼此交通せざ自處して其德性を養ひ其性格を成し所謂單行進歩にして絶對的の性格を有せり故に之を他國の相差隔するに比すれば更ま一層の特色あるを見る是れ即ち日本の獨立を維持して永く日本たるを得る所以なり然るに耶蘇教は其出生西洋にあり其の發達西洋まあり其の本城西洋にあり故に假令ひ西洋に適するの点ある

も決して日本に適すること能はざるなり適せざるの國にして適せざるの宗教を採用するは喜んで禍亂を招くにあらざんば則ち自ら國性を破壞するに外ならざ苟も黑白を別つの眼光あるものゝ疾く其の不可なるを知れり之に反して佛教は源を印度に發すと雖學理的の宗教にして各國の國情に偏頗せざ各國の特性に乖離せざ我國に入て茲に千三百年常に我國の文明を導き我國の發達と平和とを助け而して教亂の如きは未だ曾て之を起さざ況んや國亂れや其の未だ傳らざるの前國史既に千年の久しきに亘ると雖之を通計するときは我文明の大部分は佛教に依て發達せりや謂はざるべからざ乃ち佛

教の我國に於ける啻に人心の指導道德の標準なるのみならず又文明の神髓國性の要素にして永く絶つべからざるの關係あるを知るべし

第三耶蘇教は西洋を以て本國とし時ありて尊國政畧の機關となるが故に我國に不利益なるも佛教は之に反す名義を一視同仁の神教に托し手段を慈善博愛の宗旨に籍り甘言以て人を誘ひ輭語以て人を導き阿諛談笑の間に能く人を馬鹿にし進退應接の間に能く人を阿房にして先づ其の本心を奪去し自國の觀念を喪失し歐米崇拜の熱度を高めしめ而して後ち噬搏の欲を逞せんとするは是卽ち歐洲尊國政畧の慣用手段なり古來彼れが經歷

し來りたる事跡を檢するに彼れが甘言に欺かれ彼れが術中に陷入り國を亡し家を破りたるもの歷然として史册に溢れ志士として血淚滂沱たらしむるもの實に無數なり彼れ博愛を說くと雖是れ且らく世に觀すの標幟たるに過ぎず其の尊奉する所の神は我は嫉妬の神なりや自稱せしにあらずや卽ら他神を拜し他宗を信ずる者を嫉みて相容れず善惡の標準を獨り神の好惡に取て復た正理公道の如何を顧みず私情を以て賞罰し我意を以て是非し其性質實に恐るべしとす性質既に然り其の行跡亦厭はざるべからず試に歐洲中世に於ける耶蘇教の行跡を檢するに每に教亂を起し屢國亂を釀して慘毒を天

下に流せしこと擧て云ふべからざ加之數多の學者を屠殺して學術の進歩を妨げ新發明の利器を禁じて人智の發達を防ぎ其禍其害全歐に溢れたるを見る之を要するに社會文明の萌芽を殺ひで之をして永く暗黑時代たらしむるの策に外ならざ然れども漸くにして文明の時機相逼まり春の將に來らんとするが如く夜の將に曙んとするが如く之を能く禦ぐものなく耶蘇教の强壓力と雖時機の勃然たるには抗する能はざして其の勢力茲に一頓挫を呈したりき然れども事物の理たる相交はること久しければ終に其の氣に感じ其の觸るゝこと密なれば終に其の性に染む耶蘇教は文明妨害の仇怨あるにも拘らざ

歐洲一般の性質は大に耶蘇教に感染せる者あり故に口に博愛を談じて手に侵略の旗を靡へし陽に平和を唱へて陰に奪掠を企て些も正理公道を問はざ將た何ぞ友愛情誼を重ぜんや其性質慘酷苛毒にして其氣象殘忍暴戾なりと云ふべし而して其の奪國の手段たるや臨機應變謀め測るべからざと雖其の慣用せる方法は通商宗教軍隊にして財を削るに通商を以てし好を結ぶに宗教を以てし威を觀めすに軍隊を以てし剛柔緩急一ならざと雖一は以て實力を弱はめ一は以て精神を奪ひ一は以て氣力を挫き有形に無形に交相誘ふて國勢の傾壞を待つにあり其の表裏相反し言行相背くの狀耶蘇教の主義とは

酷だ相似たり是れ所謂相交はること久ふして其の氣に感じ相觸るゝこと密にして其性に染みたるものにあらざや是を以て耶蘇教の歐洲に於けるや未だ宗教本分の功績あるを見ざ即ち其の功は道德の養成にあらざして專國の機關たるにあり其の名威を有する所以のものも亦宗教本分の職務にあらざして侵畧の幇助たるにあゞ嗚呼其の教の基礎既に正理公道に背て即ち人爲の妄想而も嫉妬の神とり成立せり其の教の作用豈道德の感化に望みあらんや其の國の宗教既に僞愛詐善を主とせり其の感化の及ぶ所豈呑噬搏害の殘忍に流れざらんや宜哉歐洲の歷史を繙く者をして陰雲慘憺悲風蕭條の境

を過きて行々哭泣悲憤怨訴の鬼に接するの感あらしむるや其遠き時代に屬する者は之を置き第十八世紀以來に於ける歐人暴狀の最も甚しきものはフヰンランドに於げる魯人の處置土耳其埃及に於ける諸强國の處置、アルジエリヤに於ける佛人の處置、印度支那に於ける英人の處置、サモアに於ける獨人の處置にして呑噬自ら遑ふし搏害自ら快とし其の行爲は啻道に負き義に違するのみならざ亦全く人情に戾り苟も人面を被ふる者の敢て爲すべからざるの事にして虎狼と雖若し一思せば應に之を慚づべし然るに文明を以て誇稱する各國の名士にして其の舉動此の如きを聞く誰れか呆然たらざらんや此等

貧弱の國々にして斯る悲境に陷入りたる顚末は各相異りたる事情ありと雖概して之を言ふときは通商之孔が端を開き財力を削て漸く內地に干涉し宗教は隱暗の間に周旋し先づ人心をして空理の境に彷徨せしめ精神腐敗して民情乖離し自ら愛國の觀念に乏きに乘じて兵威以て之を挫き遂に最終の談判を開くは彼等習用の順序なるが如し特に埃及內治混雜の日に於けるや雜居の外人は埃及內の耶蘇教徒と結托して之をして其の國の回々教徒と軋轢せしめ更に又離間の方法を用ひて兩教徒に劇烈なる敵意を挾ましめたる之を埃及の國亂遂に甚しく復た回收の望みなきに至らしめたる一大原因なりとす又千八百五十八年英清條約改正の時に際し英國在留の英人は本國政府に勸告して曰く「耶蘇教徒の慣習先規に順適せざる清國の法律を盡く廢止すべき事」の一條を改正案に加へらるべしと幸にして之を加へざりしも雖其の勸告たる何等の暴戾ぞや嗚呼清國は東洋の一大舊國なり其の法律の如何は外人の容喙すべきものにあらざ然るに彼等貿易上不理の利益を擅にするも虎狼未だ饜かざ耶蘇教規云々の辭を搆來て諸他の法律を左右せんとす何ぞ其の言の傲慢無禮にして其の心の險惡不道なるや余輩之を追想する毎に未だ曾て憤慨眦を裂き怒髮冠を衝かざるはなし世の耶蘇教徒と應對し耶蘇

教國と交通する者は自ら警誡せざして可ならんや當時我國民にして耶蘇教徒となりたるもの通計七萬に過ぎざ以て四千萬人に比すれば實に僅少なるのみ從て勢力甚だ微にして羽翼猶弱きが爲め忌憚する所ありて未だ耶蘇教徒の本色を現はさゞるもの、如し然れども蜂計歛め難くして雖翼脫し易く此等少數教徒の行爲業に已に同胞一般の注意を惹く者あて何ぞや曰く國體を重んぜざるの傾きある是れなり愛國の精神に乏しき態ある是れなり同胞人民とり却て耶蘇本國の人を親むの体ある是れなを請ふ事實を擧て之を示さん

夫れ神胤連綿の神國に生れ天壤無窮の我國に住して神

風聖雨の下に生活するもの國家の祭日に際し皇室の祝日に當り離れか齋戒沐浴して靄雲佳氣の間に國家の盛大を祈り皇運の無窮を唱歌せざるものあらんや然るに獨り耶蘇教徒は耶蘇誕辰の祭日あるを知て此の大典あるを知らざるものは何ぞや是れ全く彼徒の眼中我國体の重ぜべく愛すべきものなくして唯耶蘇本國の國体を愛國心あるのみ又私立大學の設立を計畫せんとしては先づ之を耶蘇本國の米人に議し一大教會を設立せんやして は先づ之を耶蘇本國の信徒に談じ内盟議約調ふて後ち之を我邦の有志に公布するものは何ぞや是れ全く彼等が眼中自國の同胞を見ざして本心既に歐米に歸化せる

が致す所ゐなり若し夫れ一朝事ありて砲烟彈雨の間に見ゆることあらば彼等數萬の信徒は先づ反旗を飜して米に走らざんば必ず英に飛ばんこと百千の日月を懸て見るが如し小數の信徒猶且つ然り若し之をして益多數にして勢力愈强からしむるときは國家の不利果して如何ぞや禍亂自ら喜むものにあらざるよりは誰れか之を我國民の宗教となすの便を說くものあらんや之に反して佛教は支那に渡ては支那の文化を助け日本に渡ては日本の文化を助けしのみならず今日既に能く日本の特性に適應し國体之に據て堅固に民心之に據て一致し愛國の精神之に據て盛なるを得其の國家の命運と親密

なる關係を有することを固より言を待たざるなり是れ予が我國の國教は耶蘇教を捨て、佛教を取らざるべからざると云ふ所以なり

第二章　宗教の性質

凡そ天下の事物を探求考索するに當りては先づ其の本性を辨ぜざんば此れが正鵠を得ることを甚だ遠しとは古今學術上の定則にして此の言や實に吾人をして眞理の彼岸に到達せしむるの羅針盤なる方今の學者宗教を論ずるもの一にして足らざるを雖ども或は廣漠に失し學理に偏して長鞭馬腹に及ぶの歎あるにあらざれば則ち奇論に流れ新說に過ぎ盲者評象の笑を招くものありて概

ね曖昧模糊の間に筆を閣き徒らに讀者をして五里霧中に彷徨せしむる所以のものは一に此れが本性を定め其の區域を明示せざるの罪に坐するのみ學者豈に猛省せざるべけんや

夫れ奇論新說を吐露することは固より學者各自の特權なれば敢て深く咎むべきものにはあらざれども其の所謂奇論新說は勉めて論理の規道を履むで黑白明らかに其の範圍を示し朱紫詳かに其性質を分ち一目瞭然世を誤まらしむることを勿らんことを謹まざるべからざる是れ即はち學者の義務にして又其の本分と云ふべし然るに方今の學者徒らに奇を衒ひ辨を好むで堅白異同の僻論を逞ふし氷炭其の質を混じ霄壤其の際を認めざるもの四方に輩出し宗教の名目を濫用し其の範圍を蹂躙して玉石を分つ能はざらしめ世を惑はすもの多きは豈に悲歎すべきにあらざや

蓋し宗教の目は固と英語の所謂「レリジョン」なるものを譯し來りたるものにして東洋固有の教法とは其性質全く異にして其間井然區別の存するものなり然るに學者更に此れが區別を曉らめざして佛教なり儒教なる哲學なり理學なる苟も智力情感に關するものには悉く此の目を施し甚だしきに至ては「世に眞の無宗教者なし無宗教者も亦一種の宗教者なる」と放言し揚々得色あるもの

あり其れ而り而して何れの世何れの時を問はず愚者は恒に多く識者は恒に稀なるが故ゐ妄説も時ありて多數を制し僻論も或は勢力を得て所謂人象天に勝ち衆口金の鑠すその古言の如く眞理之れが爲めに隱くれ公道之れが爲めゐ通ぜざ遂に宗教の目は社會一般都て教法の惣名となりたれば今日に於ては之を原語の「レリジヨン」意味に限らんとするも六日の菖蒲十日の菊たるに過ぎざるのみならざ却て縊を救はんと欲して其の足を引き天を呰んと欲して地に俯するの恐れなきにあらざ故に余は敢て世論に背かざ佛教を呼で宗教とするも儒教を名けて宗教と云ふも其の名稱の如きは暫らく之を措

き宗教の定義を下して直に教体自身の本義を論窮し宗教と非宗教の區域を明了にせんことを期するなり

宗教の定義を泰西學説の二三に求むるに曰く宗教の精神は眞美なるものに對して發揮する熱情なりと又曰く宗教とは吾人の義務は神命なりと承認するにありと又曰く吾人の意中に上帝を想定して以て安心立命するを云ふと其の他一にして足らざ雖要するに是惟「レリジヨン」の意義を注解せるものに過ぎざして東洋固有の教法を混同含有したる我邦現行の所謂宗教の定義にあらざるが故に余も敢て此等の學説に反することを省みざして左の如き新定義を下さゞるべからざるの止を得ざ

るに至れり

我邦現行の宗教や何ぞや曰く信仰するに足るべき目的物を指示して信仰者をして現在未來に於て安心立命せしめ無限の快樂の與ふるものを云ふ余は今此の定義を分析して左の要素を得たれば已下三節に於て一々之を論窮して餘蘊なからしめんと欲するなり

第一信仰するに足るべき目的物を指示するものならざる可らざ

第二現在未來に於て安心せしむるものならざる可らざ

第三現在未來に於て無限の快樂を與ふるものならざる可らざ

已上三ケの要素を具備して茲に始めて眞正の宗教たることを得べきものなり若し夫れ此の中一二の要素を欠くことあらば未だ以て宗教と名くるに足らざるなり然れども今且らく讀者の便を計り世人の認めて以て宗教となすものは敢て此れが要素の欠備を問はず汎く宗教の名目を假用するに吝さからざるも已下順次講窮の下に於て適當の機會を得て一々是を詳論すべければ讀者は宗教の眞僞正邪を自ら其の間に發見することを得べし

第一節　信仰するに足るべき目的物を指示す

るものならざる可らざ

抑も人類が一定の方向を取て針路を爰に定むるものは蓋し偶然にあらざ余之を航海者に聞く水天髣髴の滄溟に艤し千浪萬波の海洋に航する凧船艦隊は必ず一定の針路と豫定の港灣ありて而して后ち纜を解くや況んや千挫不屈の精神を起し萬折不撓の確信を樹しめんと欲する宗教に於ては確乎不動の目的物を指示するの必要なるは固より論なきなり而して其の目的物の本體に至ては宗教の所立相異なるに隨て亦同一ならざるは自然の勢ひなりと雖も要するに宗教の目的物として茲に論窮すべきの必要を見るものは耶蘇教や佛教の二者に過

ぎざれば已下の講説亦二教の外に出てざるべし

第一段　耶蘇教の目的物

森羅万象の原因を疑ひ草木禽獸の發育を訝かり遂に一種の創造主宰者を想出し名て全智全能の上帝や云ふ是れ即はち耶蘇宗教信仰の目的物なり而して其の上帝の存否は以て本宗の眞偽正邪に關し本宗の眞偽正邪は即はち夥多群生の迷悟昇沈の由て分る、所以なるが故に古來の學者亦此れが研窮に怠らざして其の著書少なからざれば余は唯其の論点の適切なるもの、みを摘出評論して敢て冗言複説の嫌ひなかんことを期すべし

抑も耶蘇教徒が上帝の存在を仰信する理由は一にして

足らざや雖其の最も顯著なるものを擧ぐれば要するに左の數條件に外ならず

第一條件　近世哲學の大家上帝の存在を說くもの少なからず此等の大家既に之を信ぜば豈に信ぜざるを得んやや

夫れ眞理は卽ち眞理にして名分の尊卑學識の多少によりて左右すべきものにあらず學者の論未だ必ずしも眞理ならず名家の說未だ必ずしも卓論ならず此等二三の家言によりて世人の信仰を强ひんとするも人物崇拜の暗黑時代にあらざるよりは到底行ふべからざるなり況んや此等近世哲學の著書上帝の存在を証明するも其の

所謂上帝と耶蘇教の所謂上帝とは名同なるも義異なるものに於てはや何を以て同名異義と云ふ乎曰く近世哲學の大勢は既に萬有已外の上帝を破滅して將に萬有卽上帝の原則に向はんとすればなり試に看よ近世哲學の開祖として其の名を知られたるデカルト氏の如き其の著書中上帝を說くもの少しとせざ然れども予を以て之を見れば氏は斷じて全智全能の上帝を信ぜざるを知るなり何とおれば氏が哲學の論據とする所は「吾は思ふ故に我はあり」やの二句にありて其の我なるものを推及して思想に歸し其の思想を推窮して上帝に歸し而して茲に筆を止めたりき若し氏をして百尺竿頭一歩を進ましめ

なば上帝と吾人の思想とも必ずや二體ならざるして萬有即上帝の妙理に到達するや明らかなり然れども氏未だ此の堂に上らざるして曖昧糢糊の間に論じ去れるを以て遂に基督教徒をして亦其の同胞信徒なりと誤認せしむるに至るを焉ぞ知らん氏に假すに尚ほ十年の春秋を以てせば萬物一體の原理を明らむることを噫氏は生きて眞理の考窮者たり死後誣ふるに妄想家の同胞を以てせらる誰れか氏の爲に惜まざらんや氏をして靈あらしめば必ず地下に憤懣せん

又彼の近世哲學の大家スピノサ氏の如き其の著書中上帝を說くもの一にして足らざるも雖氏が所謂上帝とは絕

對の眞理を指したるに外ならざる氏が哲學の要領は宇宙の萬象を三ケの總念に區分して其の第一を本体とし第二を屬性とし第三を模樣となせり而して其の第一の本體とは即はち眞理所謂上帝にして宇宙に遍滿し森羅萬象の本體となりて緣に觸れ物に感じ出沒起伏自在にして而も不生不滅不增不減なるを猶ほ蒼洋の波相は千變萬化なるも水量の增減なきが如し而して其の波相の大小高低は即ち屬性模樣を以て判すべしとの謂ひにして耶蘇教徒の上帝とは同名異義なること固より爭ふべからざるなり其他近世哲學書中上帝の說を見ること甚だ多しと雖要するに學說研窮の便宜上より上帝なる言語

を假設して眞理の標準を茲に取り人類の智觀已上に名けたる形容詞にあらざんば萬有卽上帝々々卽萬有、上帝と萬有と不離不二融通無碍の原理に名けたるに過ぎざるなり然れば則ち近世の哲學大家が上帝の存在を証明するが故に耶蘇教の所謂上帝なるもの必ず存在すべしと云ふと實を極めざるの妄信と云はざるを得ざるべし

第二條件　凡そ事物に完全と云ふことあれば必ず不完全と云ふことあり制限と云ふことあれば必ず無制限と云ふことあるは理の觀易き所なる夫れ然り而して吾人々類の身心は實に不完全なり又有制限なり故に此の不完全有制限已外ふ於て完全且つ無制限なる絶對的の大能力者なくんばあらざ此れ卽はち上帝なりと

此れ自家撞着の言にして却て絶對的上帝の不在を証明するものと云はざるを得ざ何となれば完全不完全有制限無制限の名目は固と物々相對によりて起るものにして眞正絶對の奥義を叩きたるものにはあらざ何を以て之を云ふ乎曰く完全の名は不完全に對して起り有制限の目は無制限によりて生ぜるものにして既に完全已外に不完全を許し無制限已外に有制限を見るものなるが故に遂に相對の域を脫することを能はざることを猶ほ彼境

の寸短に對して此境の長尺を悟るが如し既に彼境の寸短に對して得たる長尺なるが故に又他境の長丈に對すれば既に得たるの長尺も亦尺短の次位に下らざるをゝんや既に不完全有制限に對して得たる完全無限の上帝なれば又焉ぞ此の上帝已外に一層優等なる完全無限の能全者なしと云ふを得んや由是觀之相對の目は優劣長短底止する所ゐを知らざして遂に一定無限の有力者を認むる能はざるなり故に耶蘇教徒の完全無限の上帝とは相對中の完全無限にして絶對の完全無限にあらざるなり若し夫れ絶對的の完全無限の上帝を立てんと欲せば完全已外に不完全を見ざ無限已外に有限を許さざして有限の本體即ち無限不完全の自性即ち完全、完全即不完全、無限即有限にして萬有不二の實理に歸するにあらざんば得て談ぜべからざるなり故に云ふ耶蘇教の絶對の上帝とは自家撞着の說にして却て絶對的上帝の不在を証明するものなりと

第三條件　仰て天文を觀れば日月星辰は整然として其の規道を紊さざ俯而地理を察すれば山嶽江海は森然として其の分を守り寒暑の往來四季の循環草木禽獸の發育各々其の時を變ぜざ豈に奇妙の法則ならざや是れ必ざ全智全能の主宰者ありて此の法規を作

爲せしものに外ならざる是れ即ち上帝なりと此の理由たる暗黑時代の妄說にして理哲學の盛んなる十九世紀の今日にありては幾んど辨駁の勞を要せざるが如し英國哲學の大家スペンセル氏嘗て云へることあり太古の原人は宇宙の法則を知らざると蓋し太古の原人は智識未だ進まざる推理の思想猶乏しきが故に宇宙の萬象一として奇ならざるなく妙ならざるなし是以て日月星辰の運行其の規を過たざるを見ては是れ必ず全能の有力者ありて之を主宰するものならんと想像し山嶽江海の依然として其の形を改めざるを觀しては是れ必ず無限の智者ありて之を支配するものならんと妄信し禽獸草木の發育するを案じては是れ必ず絕對の上帝ありて之を創造するものならんと思慮するは敢て深く異しむに足らざるなり然れども社會進化の大勢は此の妄想を悠久に傳ふるを欲せざして勢力保存の原則は理學に現はれ原因結果の法規は哲學に出で、此等原人の妄想は遂に其の痕跡を留むるの地なきに至りたるは實に十九世紀の今日なれば該教信徒の外誰れか宇宙の萬象の變化運行を以て上帝の支配に歸するものあらんや乞ふ少しく其の蒙を啓かん

夫れ既知の事實を以て未知の事實を推知するは一般論理の承認する所ろにして之を人類社會の實際に徵すれ

ば推知の方法最も其の多きに居るものなり即ち舟子が一片の黒雲空天に横はるを見て風雨の起るを察し獵師が野獸の蹄跡に因て其の巣窟を探り醫師が吐瀉物に就て其の病性を知るが如き皆此の推知の方法に藉らざるはなし然りと雖も余は未だ之を聞かざ未知の事實を以て未知の事實を推知することを

今假りに一歩を讓りて此の新法ありとするも余は甚だ其の結果を疑はざるを得ざるなり何となれば既知の事實を以て未知の事實を推知するも百發百中なること能はざして一片の黒雲必ずしも風雨の前兆と云ふべからざ野獸の蹄跡必ずしも巣窟に達すと保すべからざ況んや未知の事實を以て未知の事實を推知せんとするが如き暗夜の發銃も啻ならざるものに於ては其の結果最も危險と云はざるべからざ彼れ耶蘇教徒が日月星辰の運行を見山嶽江海の依然たるを察し其の果して奇なるが果して妙なるかを窮めざして直に奇と呼び妙と叫び而して此の奇妙不可思議の事實を以て上帝の作用に歸せんとするは是れ所謂未知の事實を以て未知の事實を証明せんとする論理の規道を誤りたるものにあらざして何ぞや且つ夫れ日月星辰の運行山嶽江海の依然草木禽獸の發育の如きは太古に於ては不可思議のものたるも文化發達の今日に於ては不可思議的のものにはあらざし

て寧ろ可思議的のものなれば何ぞ未知の事實を以て未知の事實を推知せんとするが如き危險の新法を用ふるを要せんや

抑も世界開闢の由來を尋ぬるに太古宇宙の中間に於て渾沌たる一團の火雲ありて其の熱度漸く減少するに從ひ求心力内部に生じて中心に引き遠心力外部に發して空間に招き一團の火雲遂に四分五裂して數多の球丸となりて空中に飛散し而して其の數多の球丸互に相引き相擊ちて其の位置を保ち依然今日に至れるものなり則はち月の地球に於ける地球の大陽に於ける大陽の恒星に於けるが如く相互の關係にとりて各自の位置を保

つものなり何ぞ上帝の作用を俟て天心に繫るものならんや又其の山嶽江海の初めて現出せし所以のものは地球固と是れ渾沌たる火雲の分裂せし一部分なれば太古に泝りて之を尋ぬるに流動體なるが故に其の未だ固形體たらざるに當て他星の引力の爲めに所々に凝集し凸凹高低自然に生じ以て今日の山海をなせるものなり而して後も數多の歲月を經過するに從ひ草木禽獸自然に其の上に發生せるものは實ま今日吾人の祖先なりざれども太古の原人は此等の道理を知らざるが故に一に奇と呼び妙と叫び遂に上帝の作用に歸したるに外ならざるなり之れ余が暗黑時代の妄信となす所以なり

已上の三大原則は有神論者が上帝の存在を証明するの金城鐵壁とおす所以なれども其の論據極めて薄弱にして到底世人の信用を博するに足らざるものなれども今重て証明學の原則に參照して之れが價値を評論せん

夫れ上帝在否の問題は証明學上の所謂爭点事實にして三大原則は之を証明するの爭点關係の事實に當るべし而して其の爭点關係事實の効力如何によりて爭点事實の眞偽を判明するものなれば此の三大原則の關係事實と上帝存否の爭点事實との關係を探求すれば果して其の証明を許すの價値あるや否やを推知することを得べければ左に之を論ぜん

抑も証明學の原則として爭点に關係なき事實は其の証明を許す能はざるなり何とおれば關係なきの事實は爭点を判明するの効用なければなり他例を假て之を示せば高嶽に蛤貝の發生有無の爭点を証明せんが爲めに海到に蛤貝發生の事實を以てせんとするも高嶽と海底とは其の關係なきが故に毫も爭点を決するの効力なきが如し今此の三大原則は幾んど海底の蛤貝に類するものにはあらざる乎余は甚だ其の証明許否の難關を經て公道眞理の判官に呈出するの困難なるを信ぜるなり何を以て之を云ふ乎曰く其の近世哲學者の上帝を唱道するものあるも耶蘇教の所謂上帝とは同名異義にして蛤貝

の名同じきを聞て嶽海を混じたるものにはあらざる乎其の人類の不完全有制限なるを認めて此の已外に完全無限の上帝ありとなしたるものは海底の蛤貝を見て海底既に此れあり況んや高嶽に於ては此れに倍するものなきを得んやとの妄像を浮べたるものにはあらざる乎其の日月の運行草木の榮枯を觀して神爲に歸したるものは蛤貝の堅固なるものを認めて高嶽の感化にとるものと妄信したるものにはあらざる乎前既に辨ぜるが如く此等三大原則は更に上帝在否の爭点に關係なきものなればなを此等無關係の事實は百千ありと雖爭点を決するに其の効力なきこと猶ほ千万の零數を集むるも尙ほ零數ふして一ケの個位に上らざるが如し故ふ云ふ証明許否の難關を經て眞理の判廷に呈出すること能はざるに由て之を觀れば耶蘇教の目的物たる上帝は單に信徒の想像物に止まりて學理の承認するものにあらざるが故に第一要素の目的物を欠くものと云はざるべからず既に第一要素を欠く豈に眞正の宗教となすを得んや

第二段　佛教の目的物

佛陀の法輪を轉ずるや猶ほ大醫の應病投劑の手段によりて患者を治するが如く隨宜開導の法規を守るが故に其の所說八万四千の多きに涉るを以て各宗派其の目的

物も必ずしも亦一ならざると雖も要するに所立の佛身三種あり曰く法身佛曰く報身佛曰く應身佛是れなり此の三種の佛身を以て吾人々類の目前見事の事物に對說すれば宇宙の萬有を組織する實質は是れ法身佛にして組織の形狀は是れ卽ち報身佛なり而して其の需用に應じて各自の活用を爲すものは是れ當に應身佛なるべし凡界の所謂體相用の三大とは之れなり更に之を一物体の上に付て比說すれば其の物體を組織せる實體は卽ち六十余元素にして是れ體大なり（尅實すれば六十餘元素なるものは可見可觸の有形物にして之を佛界の三身に配當すれば寧ろ報身佛に契當すべきものにして不可見不可觸の法身の理佛に當るべき者にあらずと雖今暫ちく萬有の實質は六十餘元素の外ならずとの一点を轉用して讀者の便に供するまでなり已下之に倣ふ乞ふ誤る勿れ）其の體大集合して方となり圓となり長となり短となりて嚴然他界と畛別するものは是れ卽ち相大なり而して其の相に隨て需用を異にし火鉢の相を示すものは火を容る、の用大にして茶碗の相を現ずるものは茶を容る、の用大となるなり如此體大より進んで相用の二大を現出せる已上は各自の特性特用を守りて他界と別異すと雖其の實體に至ては悉く六十餘元素に外ならずして同一体と云はざるべからず是れ體大は宇宙萬有の實質なるが故なり而して此の三大を佛界に於ては三身と名く已下且く三身を辨述して后ち所信の目的物を提出すべし

森羅萬象の本體となりて宇宙に遍滿せる不可見不可聞の眞理を以て自體となすもの是を名て法身佛と云ふ然れば則はち森羅万象の本體は是れ即ち法身佛の自體にして其の盛衰榮枯は法身佛の運動行爲に外ならざるなり夫れ宇宙の萬象多しと雖其の本體を尅論すれば各自の特性を有せざして悉く眞理海中に歸せざるを得ざ何を以て之を云ふ乎曰く萬有は皆是れ因緣假生にして萬古不易の特性を存せざればなり試に看よ百花の爛熳たるも草木の蒼々たるも長く其の榮を保つ能はざ皓々たる滿月も半缺弧弦の晦夕あり赫々たる旭日も西山に沒するの晩天あり天然不動の富岳も地震の爲めには壞崩せざるを得ざ千古未だ嘗て涸れざる琵琶の湖水も他日高嶽と化するなきを保つべからざ而して人間何ぞ獨り長生不死の理あらんや觀し來て茲に至れば幾んど天下の事物一として萬古不易のものあることなく悉く是れ因緣に依て假生せるのみ因緣假生の故に固實なる体性なし固實なる体性なきが故に能く因緣假生す之を復言せば無實性の故に緣起し緣起の故に無實性なり乃ち萬有の生滅起動は惟是れ因緣の作用に任じ因緣起れば萬有茲に起り因緣滅すれば萬有茲に滅して百世常住萬古不易なる能はざるものは實に之れが爲めなり然れば則

ち何を以て其の本體と認むべき乎曰く唯宇宙に遍滿せる眞理の大道ありて存するのみ因緣合する所因一物茲に生じ因緣散する所因一物茲に滅するは是れ即ち眞理なり其の眞理は何によりて生ずる乎曰く眞理は則ち眞理にして不生不滅不增不減なる本來自然の大法なり此の大法を離れて萬有あることなく萬有のある所因眞理必ず之に從ふものなり而して其の眞理の本体に至ては言象を蹉蹄に絕し思慮を人智に亡したる妙理にして惟緣に觸れ物に感じて千狀萬態の假相を現出するものと云ふに止まるのみ故に眞理の大道眼を以て宇宙の萬有を通觀すれば萬有悉く眞理ならざるなく萬態擧て大道ならざるなし萬物の擧體即眞理にして眞理の當體即ち萬態なり要するに眞理は幾多の因緣に應じて其の事物の相を現すと雖ども自體の永く常住たるを失はず自體常住なりと雖ども因緣に應じて万象起滅の自在なるを得ること蓋し相得ざるのみならず茲に相待て而して之れが體用の全を顯はすものなり乃ち自體の常住なるは諸種の因緣に應じて各々事相の殊別ある所以なり各々事相の殊別あるは即ち因緣の不同に一任して毫も因緣に背かざるを示すものなり是れ即ち本體の常住なるによるが故なり當知萬象は眞理の發動せる事相なれば眞理を離れて自立することを得ず眞理は萬象の本體

なれば萬象を外にして孤然獨處することなきを
更に之を凡界の三大に比說すれば今の法身佛即ち眞理
とは凡界の所謂體大なるものにして一切事物を組織せ
る六十餘元素の實體に當るものなり夫れ宇宙の萬象多
しと雖其の實體を分析すれば山岳江海を問はず動物植
物を論ぜず一切として六十余元素より成立せざるものは
あらず諸種の因緣にとりて元素の集合する所以是を名
て事物發生と云ひ其の元素の分散する所是を名て事物
の滅亡と云ひ其の高く團結するものを山岳と云ひ其の
深く集合するものを江海と云ふに過ぎず而して其の元
素の實體を尅すれば生なく滅なく增なく減なく古來常

住にして而も能く因緣に應じて萬象起伏の自在を得る
ざるものなり故に元素の實体上より宇宙の萬象を通觀
すれば萬象悉く六十餘元素ならざるなく萬態擧て此の
實體を具せざるゝなきなり是れ即ち佛界の所謂法身佛
なるものなり是に由て之を觀れば日月の運行寒暑の往
來四季の變化は皆此法性眞理の運動なるのみ草木の榮
枯山河の壞崩は皆此法性眞理の變化なるのみ江嶽の
鳴動禽獸の喧噪は是れ全く法性眞理の說法に外ならず
古人の所謂溪聲即是廣長舌山色豈無淸淨身とは蓋し此
の奧義を盡したる名句と云ふべきなり豈に亦愉快なら
ずや然れども所謂大聲里耳に入らざるが故に名利俗界

の凡夫此の妙理を覺知すること能はざして因緣假生の皮相に迷惑し龜毛兎角の妄像に固執して永く苦海の草藻となる而して自ら其の草藻たるを知らざる名利の奴隷となる而して自ら其の奴隷たるを知らざること猶ほ狂者自ら其の狂を知らざる惑者自ら其の惑を覺らざるが如し古人云はざや自ら其の愚を知るものは大愚にあらざる自ら其の惑を知るものは大惑にあらざや彼れ狂と惑との人自ら其の狂たり惑たるを曉らざる是れ狂の已に甚だしく惑も亦薄からざるものなり是を以て其狂を諭し其の惑を解かしめて法性眞理の大道を覺悟せしめんとするは是れ即ち法身佛を以て所信の目的物となすの宗派なり

第二　報身佛

自ら法性眞理の大道に坐して無色無形の法身よりて自利と利他との爲めに能く有色有形の身を現ずるものは是れ即ち報身佛にして凡界の三大を以てすれば第二の相大は正く此の報身佛なりとす報身とは何ぞや曰く原因に酬報せる佛身の謂ひなりて其の如何なる方法にとりて酬報せしか又何の必要ありて此の相貌を示現せしやは本題の最も研窮を要する所なれば乞ふ之を分論せん

(甲)　示現の必要

三尺の童子尚ほ能く之を云ふも八十の老翁尚ほ之を行

ふ能はざとは蓋し理論實際の並行し難きを意味せる千古の格言なり夫れ法性眞理の妙義は乳臭の小僧尚能く之を膾炙するも實踐躬行の老德は古來果して幾人あるや蓋し釋迦佛已來僅々指を屈するに足らざるべし釋迦佛の在世猶稀なり況んや末代の今日に於ては此の高僧に遭遇するも幾んど市街に虎狼の横行を見るが如きものからん理論は如何に高尚なるも說義は如何に眞理なるも實際既に行ふの根機なく修行既に廢れたる季世なれば幾億萬の生靈何によりてか此の迷夢を攪破し此の苦界を蟬脫せんや茲に於て法性眞理の實體を相貌に示現して易信易行の悟道を講ぜざんばあるべからざる是れ

即ち報身佛示現の必要ある所以なり暫らく之を凡界の相大に對說すれば六十餘元素の體大あることを知るとも雖諸種の因緣に形狀を現出することなくんば又何の用かあらんや且つ夫れ體大あることを知るものは僅に專門學者の一部分に過ぎざして一般凡庸の知る所にあらざ蓋し彼れ專門學者は之を實際經驗して窮理の材料に供し自己の智識を博ろめ以て自ら益することを實に少なからざと雖一般凡庸は假令體大元素の何物たることを了知すると雖此等體大元素が諸種の因緣に應じて或は山岳江海と變じて其の精神を樂ましめ或は蒼葉綠樹と化して其の幽鬱を散ぜしめざんば日用の器具となる

て其の需用を救くるにあらざんば又何の効かあらんや是れ即ち體大を全ふしたる相大示現の必要ある所以なり報身佛の出現豈に亦偶然ならんや

凡そ宗教に於て尊ぶ所のものは理論にあらざして寧ろ實際にあるが故に實際に短にして理論に長ぜるものは衰ゑ易く理論に短なるも實際に長ぜるものは常に盛んならざるなし之を現時の大勢に徴するに耶蘇教の如きは其の教理幾んど眞理の外に驅逐せられ妄誕不稽の愚俗教なるにも拘らず歐米數億萬の人心を支配して頑然動かざるものは何ぞや之に反して佛教の如きは宇宙の眞理を網羅して學者に愛せられ識者に尊ばるゝにも

拘らず萎靡振はざるものは何ぞや蓋し一は實際に長じて能く人心を籠絡するの術に巧みなるも一は理論高尚ゑ過て實際行はれず說義幽妙に失して俗耳に通ぜざるに職由せざんばあらざるなり殊に本邦佛徒の僻として理論にのみ走り佛教の眞面目は高尚なる法身佛を說くにありと誤信し却て報身佛の實際に適することを知らざるが故に轉た勝を耶蘇教に制せらるゝに至るは又深く異しむに足らざるなり佛教信徒たるもの豈に深く警戒せざるべけんや

(乙) 示現の方法

夫れ原因結果の法規は宇宙の大原則なれば報身佛の相

貌を示現するも亦此の法規に背く能はざして願行の原因によりて此の報身の結果を得たるに外ならざるなり其の願行とは何ぞや曰く希望を未來に期するは願にして此れに達するの工夫手段は即ち行なり而して其の行の卒はる所は即ち願の滿つる所にして此に於て始めて報身の佛名を得たるものなり之を近く學校生徒に譬ふに其の入校の際全科の卒業を未來に期するは願にして就學の勉强は是れ其の行なり而して全く業を卒はる所は是れ願の滿ちたる所ろにして卒業生たるの資格を有するは即ち願行の結果なるが如し然り而して其の願に二種あり何ぞや曰く一に總願二に別願なり其の總願とは凡て佛果に到達せんと欲する者の必ず起さゞるべからざるものにして四ケの巨誓より成立するものなり一に曰衆多の群生を迷界より救濟して法性眞理の大道に逍遙せしめんと誓ふものなり二に曰吾人が無始已來積集せる一切の迷執を斷破して餘孽なからしめんと誓ふものなり三に曰智識を開發して一切の事物に疑惑なからんと誓ふものなり四には曰百難を排斥して必ず佛果を開悟せんと誓ふものなり是を度斷智証の四弘誓と云ふ而して此の四弘誓願の佛果に到達せんことを希望する者に欠くべからざること恰かも一般學生の故關を辭するに當て男子立志出鄕關學若不成死不返との決

心に於けるが如く苟も佛果を開悟せんと期するものと必ず此の決心なくんば能はざるものなり故に是を總願と云ふ而して其の別願とは佛果に到達せんことを期するもの、各自殊別の希望にして恰かも學生が各自の意思に隨て法律博士を望むものは法科の專門に入り文學博士を願ふものは文科の專業に就くが如く藥師に十二の大願釋迦に五百の大願あるものは即ち是れなり而して余は今彌陀佛の別願に就て之を說かんに夫れ彌陀報身佛の別願とは四十八ヶの巨誓より成立するものなり其の要領を括言すれば曰く宇宙に遍滿せる法身の理佛を覺了するの智識なく又四弘誓願を發起して佛果に到達せんと欲する勇氣もなく永く迷界に沈溺せる怯劣魯鈍の凡夫をして彌陀報身の佛名を信念せしめ其の功德を以て佛果を開悟せしめんとの大願に外ならざるなり蓋し此の四十八ヶの巨誓別願は古來未だ嘗て起したるものなきが故に之を名て超世の大願と云ふなり然れば則ち彌陀報身の大願は四十八ヶの超世別願と四ヶの總願とを成立するものなることを知るべし而して其の行とは曰く善行無量なりと雖之を概括すれば布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智惠の六大修行にして佛果に到達するの工夫手段なること猶ほ學生の夜白黽勉して漸次に昇級するが如し然り而して此等六種の大行を修し終に能

く總別二種の願望を全ふし報身の佛體を示現したるも
のは是即ち南無阿彌陀佛なり熟此の報身佛示現の由來
を案ずるに佛は固と是れ慈悲と智慧とを以て充滿せる
古今獨歩の大導師法藏と名くる菩薩にして其の迷者の
沈溺苦海の慘狀を通觀し玉ふや血涙常に慈眼に滿ち毒
雲常に智光を遮ぎる獨り自ら証界に安坐し玉ふに忍び
ざ勇奮蹶起して此の大願を發起し無願の群生無行の凡
夫と雖我が佛名を信受する者は永く生死の苦海を蟬脱
して無漏清淨の果海に逍遙せしめんことを天地に誓ひ
爾後功を積み德を累ね遂に其の本志を達し玉ふり茲を
以て此の報佛を信受すること端心正意なるものは果海

に証入すること敢て疑ひなきものなり噫大なるかな報
身佛の願行壯なるかな報身佛の証果希くは世の無願無
行の徒速に此の佛名を信受して六道輪廻の迷根を絶て
よ

第三　應身佛

應身とは何ぞや曰く迷者の所感に應じ爲めに佛身を示
現するものを云ふ凡界の三大を以てすれば用大は即ち
此の應身佛なり蓋し實體如何に堅固なるも相狀如何に
美麗なるも其の器具に隨て之を使用するにあらざれば
敢て瓦石も異なることなきが如く法身佛の道理如何に
高尚なるも報身佛の相狀如何に美麗なるも若し迷界に

應現して惑者の根機に投合するにあらざんば誰れか又二利圓滿の佛陀あることを知るものあらんや是に由て報身の佛陀自ら其の光を隱くし吾人迷者に應同して印度に出現し廣く八萬四千の大法を演說し法報二身の佛陀あることを証明せり茲に於て法身の大理初めて世に明らかに報佛の存在初めて知らるゝに至る應身佛の出現豈に偶然ならんや然れば則はち應身の釋迦佛は所信の佛體にあらざして寧ろ迷者の開導者なりと知るべし已上三種の佛身を分說すと雖實を尅すれば三身互に相即して別物體あるものにあらざ但實體よりて名て法身と云ひ相狀よりて呼で報身と云ひ作用より呼で應身と云ふ

ふ過ぎざるものなり何となれば法身の實體願行の因緣に應て相狀を現したるものは報身にして報身自ら光を隱くし吾人迷者の所感に應じて出現せしものは應身なればなり而して此の三種の中三身相即の法身佛を以て所信の目的物となすの宗派あり又報身佛を以て所信の目的物となすの宗派あり而して其の應身佛の如きは小乘教に於て所信の目的物となすことあれども今の應身佛とは少しく教理を異にせるが故ふ寧ろ苦界の大師として尊敬するも所信の佛体とはせざるものなり

第二節・現在未來に於て安心せしむるものならざるべからざ

無常變遷の急流に立ち天災地變の社會に住して誰れか悽然憂慮せざるものあらんや仰て天象の運行を觀れば日輪は西山に沒すゞ雖復た靄然として東天に赫々たる旭日なきにあらざ月輪は半月弧弦の晦夕あると雖復た風光滿月の夜なきにあらざ俯して土壤を察すれば花は凋むと雖再び馥郁人を襲ふの春なきにあらざ枝は枯るゝと雖再び繁茂鳥を藏すの夏なきにあらざ而して人間何ぞ獨り再生の春繁茂の夏なき乎又何ぞ風光滿月の夜赫々たる旭日復り來らざる乎而して又遙に我が將來を望めば死後の境遇は果して如何靈魂の趣向する所は果して如何觀察して茲に至れば惘乎として嘆むべきなく

驅乎として賴るべきなく鬱然憮然生を聊せざ嗚呼我乎我にあらざる乎嗟呼夢乎夢にあらざる乎昔日の樂は是れ吉夢にして今日は則はち覺めたる乎且つ今日の樂まざるは是れ凶夢にして昔日我未だ眠らざる乎寧ろ白雲に乘じて天空に去らん乎將た古仙を學んで幽窟に潛まん乎寧ろ飽食煖衣牛飲馬食に此の生を送らん乎將た首陽に蕨を折て夷齊に擬せん乎天空必ずしも憂を離れざ幽窟豈に久しく樂しからんや牛飲馬食は未だ以て此の憂鬱を散ずるに足らざ首陽の遊は未だ以て此の寂寥を慰むる能はざるなり此の心卽ち吾人をして宗教界裡に歩を狂げしむるの端緒なり此の端緒漸く進んで遂に安

心立命の極度に達すれば則ち宗教の堂に上りたるものなり故に安心立命の要素を欠くものは以て宗教となすに足らざるなり乞ふ耶佛二大宗教に就て之を探らん

第一　耶蘇教の安心

想像上たり全能全智の上帝を案出し以て尊敬極りなきものは必ず天國に生ぜしむるものと安心立命するは耶蘇宗教の本旨なるがゆゑに現在一世を以て之を論ぜれば安心立命の要素全く之れなしと云ふべからざると雖普く未來に亘りて魁論すれば幾んど捕影捉風の歎なき能はざるなり何を以て之を云ふ乎曰く原因結果の大原則は夢中の上帝を旨とせざるが故に上帝の信否を問はず臨終一陣の刀風と共に生前惡因の結果忽ち現出し惡道に驅逐して復た顧慮する所ろなければなり是に由て之を觀れば耶蘇宗教は亦此の第二の要素を欠くものと云はざるべからず

第二　佛教の安心

道理を厭ふ斷見論者にあらざるたりは善因樂果惡因苦果の眞理は現在未來に亘りて動かすべからざる自然の法則なることを承諾せざるものなかるべし既に之を承諾して惡因苦果の厭惡すべきを知り善因樂果の欣求すべきを覺らば誰れか此の公道を蹈まんことを願はざるものあらんや若し夫れ修行實に適ひ信仰道に背かざれ

ば無常の刀風何ぞ恐るゝに足らん天變地異何ぞ憂ふるに及ばんや無常變遷は迷界の常數にして天變地異は苦界の慣例なり此の常數と慣例は能く吾人をして公道を蹈ましむるの引導者なり此の引導者なかりせば吾人又何の日か眞如の月を詠め何の時か輪廻の環を出でんや公道を蹈む佛教信徒たるものは須らく此の引導者に向て拜謝する所為なくんばあらざ既に拜謝することを知る又何ぞ恐るゝことあらんや暫らく之を非常を警戒する道路の巡査に譬ふ跫然たる靴聲を聞くや滿面色を失ひ冷汗背を浸すものは是れ公道の賊法律の罪人にあらざや又同一の響を聞き安堵寢に就くものは惡因播種の覺なき良民にあらざや安堵寢に就くの良民何ぞ非常を警しむる巡査に謝する所為なくして可ならや佛教信徒幾んど此の良民の類なり嗚呼堅固なるかな佛教信徒の安心立命や死後の前途何ぞ恐るゝに足らん生前の善因は死後の樂果なること宇宙の原則之を背かざらしむ無常の世界に生れて無常を厭はざ變遷の世に住して變遷を恐れざ而して二世の快樂胸裡に滿ち安心立命肝腑に徹せり應知安心立命の要素佛教に於て始めて之を見ることを

近頃說をなすものあり曰く世に眞の無宗教者なし無宗教者も亦一種の宗教者なり苟くも人にして其の心に崇

信憑依する所ありて安心立命するものは皆宗教者なるが故に未來なしと信ずるものも又一種の宗教者と云はざるを得ずと是れ全く宗教の何物たるを解せざる好奇家の言にして固より取るに足らざる妄說なり何を以て之を云ふ乎曰く安心立命の範圍極めて狹隘にして耶蘇教と幾んど同似すればなり宗教の性質固と現在未來の二世に涉るものなるが故に其の一方に止まるものは未だ以て宗教と名くべからず假令生前に於て未來なしと安心立命するも因果の理法は之を許さず死後必ず苦樂の境遇に驅逐して生前の豫想に反するを如何せん是れ余が論者を評して宗教の何物たることを解せざる者の妄言となす所以なり蓋し論者は西洋哲學に心醉して佛教の奥義を極めざるの罪に坐するものならん其の西洋哲學に心醉すると否やは余が敢て關する所にあらざれども余は唯論者が宗教の名目を濫用して世を誤まること多きを惡むのみ論者或は曰はん吾人々類の心識即ち靈魂なるものは死後に繼續するものにあらず其の之を說くものは宗教家の我田引水論のみ何ぞ未來の安心立命を要すべけんやや夫れ心識斷續論は無形の爭点にして古今の學說少なからずと雖要するに左の三種に歸するもの、如し

唯物論者は曰く都て動物の活動は其の筋肉の伸縮によるものにして肉體已外に於て心識なる別物ありて然るにあらざるを人爲の器械が其の仕掛によりて自然に運轉するに譬ふ試に巧妙なる時計を看て其の器械に齎し其の線に螺旋を掛くるや自然ゑ旋轉して日を指し時を報じて怠らざるも其の齎次第に減じ螺旋漸く弛むに從て勢力亦微弱となり遂に全く停止するにあらざるや動物の活動幾んど此の類のみ其の勇氣敦々力らは將に山を拔き氣は將に世を蓋はんとするの壯年は是れ其の齎最も盛んにして螺旋最も强き時なり而して其の頭髮全く霜に染み耳に蟬鳴き齒落るの晩年は是れ其の齎次第ゑ減し螺旋漸く弛みたる秋なり而して其の両眼閉ぢ呼吸遲ぜざるの永眠は是れ其の齎全く涸れ螺旋全く解け旋轉を停止せるの期なり何ぞ肉體已外に於て心識なる別體ありて活動するものならんや

然れども是れ唯皮相の見に過ぎざるなり何となれば論者は唯筋肉の伸縮のみを認めて未だ其の巧妙なる作用の由來を極めざればなり彼の功妙なる時計の齎により螺旋にとりて旋轉するは則ち可なり然れども其の齎は自然に之れあるにあらざ其の螺旋は自然に掛るにあらざ必ざ人類の工夫を待つて然るにあらざや且つ夫れ動物の活動は單に衣食に止なり歩行に限らざして坐なが

ら横に万里の外を議し竪に古今の事跡を考ゑ而して喜怒愛樂自ら其の間に往來して神變測るべからざるものあるは何ぞや是れ即ち心識なるもの、別物肉體已外に存在して此の作用を呈するに外ならざるなり然るに論者は唯其の外形の器械に類するあるのみを認めて此れが由來を極めざるが故に皮相の見をなす所以なり

第二　身識併斷論

身識併斷論者は身識全く別物にして併存するものなることを認むると雖身體の斷滅する所は心識亦隨て斷滅するものとなせり其の論に曰く身體と心識とは二者相俟て茲に始めて一ケの動物を生ずるものなれば其の關係極めて密着にして分つべからざること猶車の両輪鳥の両翼に於けるが如し故に心識ありて身體なきの動物なく身體ありて心識なきの人類なし若し夫れ身體既に斷滅すれば心識亦隨て斷滅し心識斷滅すれば身體亦茲に斷滅せざるを得ざると

是れ其の一を知て未だ其の二を知らざるの論なり何を以て之を云ふ乎曰く其の心識や身體の別體を認むるは則ち可なり然れども其の有形の身體と無形の心識や斷滅を併論するに至ては正理を距る甚だ遠しと云はざるべからざるなり

身斷識續論は宗教家の口に膾炙する所にして實に宗教の淵源なり何となれば身識共に斷滅するものとせば死後の幸福求むるに足らざ來世の立命議するを要せざればなり夫れ然り而して身斷識續論は單に宗教家の我田引水論に止まるべき乎將又一般學理の是認せざるべからざるものなるか是れ本論の爭點なり若し夫れ証明學の原則に訴ゑて此れか確証を舉ぐる能はざんば萬國の宗教は畢竟社會の贅物のみ數十萬の堂宇數百萬の教師は全く國家の厄介物なるのみ速かに之を排除し之を破壞し之を歸俗せしめて生産的の需用に供せざんばあらざ若し又繼續の立証能く其の証明を與ふるものあらば既壞の堂宇は之を修繕し可憐の貧僧は之を補助して國家の爲め社會の爲めに萬世不朽の宗教を興さざんばあらざるなり而して余は斷じて其の舉証の大任に當ることを辭せざるなり即ち左の如し

（甲）勢力恒存の理

心識斷續の問題は無形の爭点なるば有形の事實を以て証明せんと欲するも其の材料なきが故に勢ひ爭点事實に無關係なる無形物を呈出せざんばあらざ是れ証明學の所謂爭点に無關係なる事實は概して証明を許さざると の原則に二三の例外ある其の一なり何が故に無關係なる他の無形物を以て爭点の事實を証明することを許す

や田く其の性質幾んど同似なるが故に爭点關係の事實と其の効用毫も差異なければなゞ而して其の心識斷續の爭点事實と性質を同似する他の無形物の事實とは果して何物なるや曰く物理學者の所謂勢力恒存の理即是れなり乞ふ其の性質を同する所以を說かん夫れ宇宙の勢力は古今同量にして增減あるものにあらざ甲に一力の減ぜるあれば乙に一力の增あり丙に一力の增あれば丁に一力の減ぜるを見るも是れ暫らく勢力の變化に過ぎざ諸種の因緣によりて或時は熱力となり或時は運動力となるも宇宙全體の力量を以て之を見れば古今增減なきこと猶海水の風緣によりて千浪萬波の大小高低

一ならざと雖其の水量を以て之を見れば更に增減なきが如しとは物理學上の原理にして一般學者の承認する所なり蓋し宇宙の事物は有形と無形を問はざ苟も一物ある已上は千化萬變して其の形狀作用を異にすること雖あるも都て斷滅に歸するものにあらざればなり無情の勢力尙ほ且つ恒存す況んや有情の心識何ぞ獨り繼續せざるの理あらんや余之を佛陀に聞く動物世界は不增不減にして又無始無終なりと蓋し甲界に死する者あれば其の心識乙界に轉生し乙界に死するものあれば丙界に受生して斷滅に歸せざ動物世界の全体とり之を見れば更に增減せざること尙物理學者の所謂勢力は變化す

るも古今增減なしと云ふが如きものなと心識繼續の理推知すべし

（乙）原因結果の理

眼を人類の行爲に注き心を意思の發動に潛め熟吉凶禍福の往來を案ずるに皆此の原因結果の理法に支配せられざるものはあらず夫れ意思の發動は物に觸れ緣に感じて喜怒愛樂必ずしも其の度を守らず人類の行爲は千狀万態にして必ずしも一定すること能はずと雖總合一括して之を云へば善惡無記の三者に歸せざるものはあらず而して其の善因は必ず樂果を引き惡因は必ず苦果を招くは宇宙の定則にして又動かすべからざるものなり夫れ然り而して其の意思の發動は無形に屬するが故に吾人は直接に之を感知すること能はざれば暫らく有形の行爲に付て原因結果の爭ふべからざる所以を述べん

彼の他人の財産を掠め他人の生命を奪ふの惡因は能く鐵窓圄圄の下に呻吟せしむるの苦果を招き公事に蠹し慈善に勉むるの善因は能く芳名を千載の下に傳ふるの榮果を感じ又彼の豐田を阡陌に連ね金錢を倉庫に堆積するの富果は是れ朝に霜を踏んで出で夕に星を戴て入る布被十年孜々怠らざるの勤勉に基因し國家を傾け身命を傷くるの惡果は是れ飽食暖衣酒池肉林の奢侈に淵

源せしものに外ならざる其の他食因によりて飽果を感じ衣因よりて暖果を覺ゑ酒因によりて醉果を招くが如き一として原因結果の理法に支配せられざるものにはあらざる此等有形の行爲既に原因結果の爭ふ可らざるまと如此何ぞ獨り無形の意志此の理法に洩るゝの理あらんや試に吾人が日夜に思慮する心猿意馬の發動を反省せと金銀堆積して山をなすの富者を見れば貪欲忽ち胸裡に滿ち窈窕たる美人に遭遇すれば愛戀忽ち心頭に浮び又洪恩山海も啻ならざる父母ゑ雖一朝意思の投合せざることあれば厭惡の瞋恚忽ち滿面に溢るゝは是れ人類社會の常態なり夫れ然ゑ而して此等心猿意馬の發動は吾人が胸裡に潛伏して未だ行爲に發表せざれば他人は之を知らざと雖若し夫れ此等心猿意馬の發動をして採影の寫眞術あらしめば先きに所謂貪欲の心猿は是れ竊盜罪賊にはあらざる乎其の愛戀の野心は是れ强姦犯にはあらざる乎而して其の厭惡の瞋恚は是れ殺親の大罪にはあらざるなき乎其の人爲の法律に觸れざる者は僅に一歩を進めたる機械的手足の行爲に傳ゑざる毛髮の間に存するのみにして原因結果の理法は決して此大罪を處するに躊躇せざるなり若し之を處するの理法なくして賞罰の標準を一に有形の行爲に取るものとせん乎猾智の曲者は常に僥倖を得有道の君子は常に不幸な

らざるを得ざ且つ夫れ有形の行爲と雖賞罰其の度を失はざることなしと云ふ可らざ何となれば人爲の法律は所謂人爲なれば人事の萬態悉く詳知せんと欲するも能はざして或は有罪を免して無辜を罪し功者を賞せざして無能を擧ぐることなきにあらざ然れば則ち此等僥倖者と不幸者には原因結果の理法遂に合すべからざるか天下の公道宇宙の眞理豈に斯の如きものならんや彼の心識斷滅論者が盜姤の僥倖夷齊の薄命を見て天道是非の歎を發したるも亦由しなきにあらざるべし然れども原因結果の大道は寸善を捨てざ毛罪を假さゞるが故に必ず感果の期なくんばあらざるなり現世に於て感果せ

ざんば未來の心識必ず之を免れざ未來の心識感果せざんば未來の心識必ず之を受くべし是れ即ち原因結果の宇宙の眞理たる所以なり原因結果の眞理ありて心識繼續の大法初めて理解することを得心識繼續の公道ありて原因結果の奥義初めて研窮することを得べきなり是に由て之を觀れば心猿意馬の惡因は未來の心識之を感じ法網に洩れたる有形の行爲も未來の心識亦之を受くべし又無辜に坐したる不幸者の心識は未來に於て必ず其の果を感じ賞與に変預らざる不幸者の心識は未來に於て必ず空しからざらん然れば則ち盜姤の僥倖何ぞ獨り怪しむに足らんや是れ過去世の果報のみ其現世の行

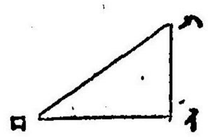
爲は未來の心識之を受くべし夷齊の薄命何ぞ獨り疑ふに足らんや是れ過去世の惡因にとるのみ其の現世の赤心は未來の心識必ず之を感ずべし何ぞ天道の是非を歎ずるの要あらんや噫大なるかな原因結果の大道や壯んなるかな心識の繼續や二者相俟て初めて宇宙の大法を識すべきかり

（丙）心識繼續の相狀

此の條項に於て心識繼續の相狀を陳述するは少しく因論に涉るの恐れあれども上既に繼續すべきことを論定し來りたるを以て勢ひ其の相狀を說かざるべからざる場合とかりたれば佛教によりて聊か之れが要領を示さん

抑も佛教に於て宇宙の萬有を通觀するに二種の法門あり曰く常住門曰く生滅門是なり其の常住門とは何ぞや曰く宇宙萬有の實體より觀察して更に事物の增減萬象の變化を見ざるの謂ひなり近く之を化學上の原理に對說すれば宇宙の萬象は千狀萬態なりや雖其の實體を分析すれば一として六十余元素に歸せざるものなし而して此の元素の實體諸種の因緣に應じ或は山嶽江海と化し或は動物植物と變じて增減生滅極まりなきが如しや雖宇宙全体の實質より之を見れば不增不減不生不滅にして古今同一なりと說くものは卽ち今の常住門の幾分を知り

たるものと云ふべし而して其の生滅門とは曰く森羅萬象の現象より觀察して更に常住の實體を見ざるの謂ひなり故に生滅門とは宇宙の萬象を觀察すれば一切として增減せざるものなく生滅せざるものなきこと猶ほ河流の混々晝夜を舍てざるが如し之を刹那生滅と云ふ(刹那とは最小の時間を云ふ)然れども其の變遷生滅するや極めて迅速にして電光石火も啻からざるが故に吾人の肉眼之を認むる能はざしして古今一貫の實體ありて存するものとなすは實に迷者の常態なり然れば則はち山嶽江海の頑然たるも動物植物の森然たるも其實を尅すれば常に變遷生滅して分毫も停止するものにあらざ昨日の森羅萬象は今日の森羅萬象にあらざ今日の心識は明日の心識にあらざ而して其の前滅後生の間に立て之れが媒介をなし能く千萬世の久しきに繼續せしむるものあり之を名て因果相續の理法と云ふ即ち昨日の森羅萬象を因として今日の森羅萬象あり今日の心識を因として明日の心識あること左圖に於て說明すべし



蓋らく圖中の「ロ」を以て現在の果とせんか是れ即ち前滅の「イ」を因として出現せしものなる而して此の「ロ」果亦永

久其の位置を保つ能はざして次刻に於て「イ」境の位置に落謝せざるべからざ此れと同時に「ハ」なるもの「ロ」の「イ」境に落謝するを因として現在の「ロ」位に立ち果體となるものゝ如り然れば則はち現在の果體は前滅のものに對して は果體と云ふべきも未來のものに對しては因體となるも亦し如此現在の果體は常に因果の二法を同時に含有して變遷生滅極まるなく永久に展轉するものなり之を吾人が臨終に就て示さば今世の心識を因として次世の心識を生じ次世の心識を因として次々世の心識を生ぜるさて猶現在分秒の間に於て互に因となり果となりて生滅遷流するが如し是れ即ち一般迷者流轉の相狀なり

第三節　現在未來に於て無限の快樂を與ふるものならざる可らざ

蠢々たる萬靈匆々たる動物其の一般の目的は果して何れにある乎龜齡鶴歳の長壽を以て是に充んとすれば東海を踏むで死を願ふの魯仲連あり汨羅に投じて壽を望まざる屈原あり金銀財寶を取て之に比せんとすれば銀猫を放棄して顧みざるの西行あり小判を措て鰯を取るの猫犬あり美食を取て之に擬せんとすれば周粟を厭ふて蕨を食するの夷齊あり五穀を斷じて佛道修行の高僧あるを如何せん然れば則はち動物一般の目的は遂に定むべからざる乎曰く快樂の二字は能く此の目的に契當

するを見るなり何を以て之を云ふ乎曰く魯仲連の東海を蹈むを願ふは生きて不平の日を送らんより寧ろ死するを以て快となすにあり屈原の生を望まざるは生て濁世の人と伍するは死して汨羅の魚や伍するの快に如かざるを信ぜればなり彼の西行法師が銀猫を棄て、顧みざるは自ら之を愛するよりも童子に與へて其の喜を詠めて自ら快とするにあり猫犬の小判を措て鰯を取るは鰯の快樂小判の比にあらざるを信ぜるにあり而して其の夷齊の周粟を厭ふは不義の周粟を飽食するの快樂は首陽の蕨に如かざ修行僧の斷食するの快樂は無上深遠の大果を期するにあればなり其の他鳥の高く天に飛び魚の深く淵に躍り猫の啼き犬の走る其の目的一として苦を厭ひ快を需むるに外ならざるなり嗚呼大なる哉快樂の二字や万靈の目的悉く茲に集まり動物の希望悉く茲に歸せざるはなし是に由て之を觀れば快樂の二字は重且大にして吾人々類が最終の目的も亦實に茲にあるが故に輕々に論過すべからざるものなる況んや現在未來に渉る無上の快樂に於ては最も注意せざんばあらざるなり而して其の快樂に眞あり偽あり實あり虛ありて其の偽を捨て、眞を取り虛を去て實に入らしめ最上無比の快樂に達せしむるものは是れ即ち宗教の本務にして又其の目的なれば此の要素を具せざるものは未だ以

て眞正の宗教と名くるに足らざるなり乞ふ耶佛二教に就て之を探らん

第一段　耶蘇教の快樂

苦樂昇沈の標準を上帝の嗤笑に取り神意に隨順するものは天國に生れ神意に背戻するものは地獄に墮すると云ふは是れ耶蘇宗の教義なるが故に昇天を欣慕するものは戰々兢々宛も薄氷を踏むが如く神意に觸るゝことを勿らんことを是れ務めざるべからざる若し夫れ一朝神怒に觸れ神意に投ぜざることあらば所謂九仞の功を一簣に欽て數年の品行は水泡に屬し多年の道義は畵餅に歸して復た無信の徒と相異なきに至る故に耶蘇教信徒の胸裡を分析すれば快樂の分子を發見すること能はざゝて唯恐怖と卑屈の二分子あるのみ若し宗教を治世しての具とおし壓制を以て品行を修め恐喝を以て道義を守らしむる專制的のものならしめば耶蘇教最も其の揆に適するものなるも苟も人をして性に順ひ道に安じ天眞爛熳雍々熙々として俯仰無畏眼中無敵の地位に逍遙せしめんを欲せば宜く恐喝を離れ壓制を去て之を導くに眞理を以てし之に誨ゆるに正道を以てし更に授くるに自由と快樂とを以てし心裡開豁他の虞なからしむるにあり然り而して耶蘇教の安心此の如く其れ恐怖あり其の道德此の如く其れ卑屈なり豈に眞正の宗教と云ふを得ん

第二段　佛教の快樂

熟吾人々類が既往の來路を顧望すれば無始已來苦海に沈沒し三界に流轉し甲界に死して乙界に生れ乙界を去りて丙界に移り生死輪廻際涯なく遂に今日に至れるものなり之を六道輪廻と云ふ蓋し貪愛の雲霧に吾人が眞智を覆はれ瞋憎の火焔に吾人が本性を焦されて自ら其の苦海の沈沒を覺らざ自ら其の流轉を知らざること猶ほ狂者の自ら狂を知らざ醉者の自ら其の醉を覺らざるが如し而して其の狂を諭とし其の醉を醒ますは是れ實に佛教の本義なるが故に若し佛教に向て起信するものあらば貪愛の雲霧茲に散じ瞋憎の火焔忽ち滅して眞心清朗廓然として大悟すること恰かも狂者の狂治し醉者の醉醒め前苦を厭ひ前非を悔ひて治醒の今日を喜ぶが如し豈に愉快なからしめんと欲するも得べけんや

試に高くヒマラヤ山の絶頂に登り佛教の覺眼を五洲に放ち同胞數億萬生活の現狀を大觀するに孜々汲々東に走り西に馳せ南に驅り北に去て交絡頻繁雜然織るが如し然れども其の歸する所は如何ぞや名利の奴隷にあらざんば修羅街頭の爭鬪なるのみ口には國家の大政を議し筆には社會の公益を論じて正々堂々有道の君子を以て自ら任ずるもの少なからざと雖衷心自ら之を議せ

ぞ良心自ら之を論ぜざして其の本來の目的を問ゐば利慾の爲にあらざんば高名を萬世に傳んを欲する野心に過ぎざ豈に名利の奴隷にあらざや又外面平和を名とするも表面博愛を唱ふるも内部に於ては兵備を嚴にし恒に他人の不幸を祝し恒に他國の災禍を賀して虎狼相持し豺豹相對するが如く陰雲慘澹大空に横はり草木も爲めに悲愁し土石も爲めに怒號するの慘狀は實に世界列國の關係なり豈に修羅街頭の爭鬪ならざや是れ所謂迷界の常狀にして狂者自ら狂を覺らざ醉者自ら醉を知らざる不幸者なればなり嗚呼汝ぢ狂者よ汝が目的とする所の高位高官は是れ唯現在五十年虛妄の快樂のみ永く萬世に益するものにあらざ嗚呼汝ぢ醉者よ汝が目的とする所の金銀の富は是れ唯天下の共有財産のみ永く汝の占有にあらざるべし借問す高位高官果して何の快樂あるや金銀財寶果して何の快樂あるや高位高官固より貴ぶべからざと云ふにあらざ金銀財寶固より頼むに足らざと云ふにあらざ然れども汝ぢが本來の目的とすべき眞理海中に逍遙することを忘れ此等假妄の快樂に沈沒して自ら甘んぜるものは抑も又何の心ぞや嗚呼又不侮ならざや世の有緣の同胞希くは佛門に歸して其の妙味を知れ

前章に於て宗教の定義を下し三ケの要素を發見して一々之を論窮し耶蘇教は非宗教にして佛教獨り眞正の宗教たることを得べきことを詳明し來りたれば本章に於ては正く眞正宗教即ち佛教の目的を說述すれば則ち事足るべしと雖耶蘇教も亦一大宗教として世人に公認せらるゝものなるが故に余も亦敢て之れが邪妄を問はゞ虛僞を論ぜゞ佛教の目的と併論するに吝さかならざるなり

第一節　耶蘇教の目的

妄想臆說を離れ標準を宇宙の眞理に取りて耶蘇教の本性を探窮考索すれば宗教として信仰するに足らざるものなること前章既に之を論述せるが如し性質既に宇宙の眞理に背反し道義既に社會の公道に逆戻せり其の目的豈に獨り善美なるの理あらんや夫れ耶蘇教初發の當時にありては其の目的一に救世昇天にありしや固より疑ふべからゞと雖是唯自家の想像臆說に止まりて宇宙の眞理に契當せゞ空妄の目的ありて實際の目的なし何もなれば其の信仰の目的物たる上帝は唯思想の空影にして復存在するものにあらざるが故に之に倚賴して昇天を希圖するも所謂木に緣て魚を求むるものにして何等の結果をも牽くべきものにあらゞ其可憐なる恰も嬰兒が慈母の死體に縋りて呱々乳を求るが如し其の乳を

求むるも死體たるの實を覺らざる時にあるて之を覺るの時は則ち失望落膽の時なり彼れ教徒上帝を尊奉するは猶上帝の眞相を認めざる前にあり其の眞に思想の空影なるを認むる時は則ち同時に我信仰の空妄なりしを歎ぜざんばあらず是れ猶夢覺めて後始めて夢中の目的物を失ふが如し之を要するに耶蘇教の目的は遂に空中の樓閣にして些も効果なきものと云ふの外なし是れ余が空妄の目的ありて實際の目的なしと斷言する所以なり惟其れ實際の目的なし此の故に一變して害世の淵源となり再變して奪國政略の機關即ち政治家の利用する所となれり其の歐洲狡猾兒に愛重せらるゝ所以實に

茲に存するなり茲を以て其の人心籠絡に愈巧みなれば其の名望愈盛にして之に拙なれば其の名望隨て衰る易し嗚呼奇なるかな耶蘇教や世を救ひ人を導くの目的に起りて國を奪ひ人を惑はすの主義に變用せられ自ら甘じて奪國の先驅侵畧の後殿と爲り公義道德に背反して愧ぢざるのみならず托して皮相の勢力を維持し以て揚々自得他教に誇る者の如し宜なるかな其の感化したる邦國に道德の行はれざるや又其の感化を受けたる民族の殘忍非道なるや余輩遥に歐天を望めば毒雲慘霧大空に横はり眞理の大陽未だ嘗て人心を照さゞるを見る又遠く歐地を眺むれば腥風沙礫を卷き血雨土石を濕ほす

を知る眞正宗教の感化未だ全く歐人の心裡に達せざるなり噫廣漠なる歐洲全土を擧て之を尋ぬるも正理何くにか存す公道何くにか存す眞正の宗教何くにか存す而して又博愛慈善なるもの果して何處に存在せるや而して彼れ自ら云ふ是れ眞正の文明なり是れ宗教の感化に依れりと若し彼れにして眞正の文明宗教の感化とせば天下又何の處か眞正の文明宗教の感化を得ざるものあらんや耶蘇教の何物たる又推知するに足るなり

第二節　佛教の目的

佛陀の法門廣漠にして八萬四千の多きに涉るを雖總合一括して之を云へば夥多動物の迷夢を攪破して法性眞理の大道を覺了せしむるにあるなり換言すれば名利蛇蝎の苦界を蟬脫して无漏清淨の樂地に逍遙せしむるに外ならざ是を名て轉迷開悟と云ふ其所謂迷悟とは何ぞや曰く智識未だ遍からざして眞理の實相を發見するこを能はざるものは是れ其の迷にして智眼既に全く開け眞理の實相明朗として掌中に浮ぶものは是れ其の悟なり猶之を細分すれば迷六悟四ノ十界となること左の如し

圖中上四ケの悟界に於て又其の証悟に分全の半滿差別

ありて分滿の証悟を以て全滿の証悟に對すれば尚ほ未だ迷界たるを免れざると雖下六ケの迷界に對して悟界と名くるなり而して其の分半の証悟は全滿の証悟に到達するの道路なり且らく之を學校生徒に譬ふに其の下級の一二を卒りたるものは全科卒業の分半を卒りたるものにして是れ即ち聲聞緣覺等の修行者なり而して其の全科卒業したるものは是れ即ち佛果の大覺位なりて之れば則ち聲緣等の下級者は悟界は則はち悟界なるも分半の悟界にして未だ以て終極の悟界に入りたるものにあらざ廣蕩たる眞理汪洋たる公道興勝として眼前に浮び慧眼普く十方を照破する全科卒業者に至て初めて全滿の佛と云ふべきなり佛教の目的實に茲に至て極まれりと云ふべし而して其の下六ケの迷界は即ち迷界なれば智識の進否才器の高低果報の優劣おきにあらざと雖所謂五十歩を以て百歩を笑ふものなるが故に如何に博學碩儒の者ありと雖如何に勝果高位の者ありと雖法性眞理の幾分を發見せざる已上は智者或は貴人と名くるは可なり然れども未だ以て悟界の人となすに足らざ何となれば吾人迷界の動物は無始已來名利の塵埃に智眼を覆はれ愛欲の火焔に心性を焦されて未だ曾て法性の大陽眞如の明月を認むること能はざ偶之を認めたりと想ふも龜毛兎角の虛影にあらざんば正邪顚倒の妄

見のみ爰を以て悲泣の聲は常に四隣に滿ち慘憺の狀は常に天下に横はれり試に胸に手を置き閉目開目して熟吾人々類が生の從來する所を案じ死の趣向する所を察し又吾人が今界に出來せし主一の必要を尋ね又其の必ず死せざるべからざるの理由を求むるに茫乎として知るに由なく瓢乎として藉るに道なく恰も大洋に磁石を失ふたる舟の如し而して唯孜々汲々名利に狂奔するの一事を認むるのみ嗚呼可憐なるかな人類の智眼や自ら來りて自ら其の來路を覺へず自ら去りて自ら其の趣向する所を知らず自ら生れて自ら其の出世の必要を忘れ自ら死して自ら其の理由を曉めず而して現在に狂奔する此の如し是れ眞に瘋癲の行爲にあらずんば白痴の所作のみ豈に悟界の智者と同日に論ずるを得べけんや

又其の孜々汲々狂奔する所の名利なるものは果して何物なるか僥倖にして芳名能く萬國に聞ゑ後世に傳ふることを得るも人壽限りあるて永く自ら娛しむこと能はず蓋世の豪傑ロシントンも拔山の英雄ナポレオンも今や僅に一握の土塊に過ぎず又金銀財寶は倉庫に滿ち豐田沃野は阡陌に連列するも是れ亦天下の共有にして死後の前途に資する能はず然れば則ち名利も遂に永く愛着固執すべきものにあらざるべし然れども吾人は此の理を知らず以て無上の幸福無限の快樂なるし而して永

久の快樂眞正の幸福を求めざ豈に顚倒の妄見にあらざや且又吾人が身體には老病死の三大苦患あゝ世界には天災地變の慘狀ありて之を避くる能はざるは迷界一般の常狀にして愛憐極りなき妻子と雖無常の刀風は之を奪ふに憚らざ巨財を投じて新に建築せし家屋と雖地震火災は之を破ぶるに吝ならざるべし嗚呼慘なるかゝる迷界の常相や時に或は山水風月の興なきにあらざ管絃唱歌の樂しみなきにあらざと雖骨肉愛別の悲聲は常に吾人の耳朶に轟き天災地變の慘狀は常に吾人の眼前に遮ぎり未だ曾て眞正の快樂眞正の幸福に接したることなし蓋し眞智未だ開けざ妄見未だ破れざして眞如の明月

法性の太陽を認むることと能はざるが故に此の苦境を脫するを得ざるなり是卽ち佛陀の教誡止む能はざる所以にして實に其の目的は此の苦境を脫し妙覺果滿の樂界に至らしめんとするに外ならざるなゝ而して其の道德を維持し社會の調和を助くるが如きは佛教主一の目的にあらざして其の目的に到達するの手段の餘光に過ぎざるなり請ふ次章の說明を待て之を知れ

第四章　目的を達する手段

茲に一ケの目的あれば茲に必ざ之に到達するの手段あり茲に一ケの手段あれば茲に必ざ其の指向すべき目的なくんばあらざ手段なきの目的は架空の妄想のみ目的

なきの手段は徒勞の行爲のみ目的と手段と相待て茲に始めて實の目的眞の手段たることを得べきなり耶蘇教如何に天國の快樂を說くも佛教如何に覺道の妙果を談ぜるも能く茲に到達するの手段方法なくんば天國の快樂美むに足らず覺道の妙果貴ぶに及ばざるなり夫れ然り而して天國の快樂果して美むべきの實覺道の妙果果して貴ぶべきの妙あるや否や請ふ之を左に論ぜん

第一節　耶蘇教の手段

正邪善惡の標準を天神の顰笑に取り神意に投合するものは正善にして神意に背反するものは邪惡となし而して其の神意に投合するの善人を死後必ず天國に引導し上帝の左右に侍坐せしむるとは是れ耶蘇教本來の目的なるが故に其の目的を全ふせんと欲するものは生涯上帝の存在を確信し始終神意に背反するの行爲を慎み起居進退一に神教に契ひ神戒に合することを以て其の手段方法となさゞるべからず若し一念之に背き之に合せざることあらば啻に昇天の榮を得る能はざるのみならず地獄に墮落して永く苦境に呻吟すべしと云ふ爰を以て本宗信徒の行爲は皮相甚だ美にして欲を忍び私に尅ち禁じ難きの酒も尙ほ能く之を禁じ絶ち難きの煙草も尙ほ能く之を絶ち其の道德能く社會を利益し其の品行能く世人に模範たるが如しと雖縕に其の內裡を洞察

するに戰々競々薄氷を蹈むが如く神意に觸れざらんことを是勉め卑屈と恐怖を以て充滿せられ復天眞爛熳活潑敢爲の分子を發見すること能はざるなり其の卑屈なること如此其の氣象なきこと如此焉ぞ能く社會を利益し世人に模範たることを得んや假令能く其の効を奏することゝありとするも是れ僅に蒙昧の社會に於て見るに過ぎゞして文化發達の今日にありては其の教義固より世を益するに足らざるのみならゞ却て禍根を釀成するものと云はざるべからゞ何となれば蒙昧時代の人類は學理を知らざるが故に實際に上帝の存在を確信し實際に神怒を恐れて衷心自ら道德を守り神戒に順ふと雖文化漸く發達するに從ひ上帝の在否を疑ひ神怒の有無を訝かり遂に全く之を恐れゞ却て犯罪の用に供するに至れば なり試に之を今日の信徒に就て檢するに博愛を說くこと昔日も異ならゞ神怒を恐るゝこと古昔に反せゞ酒を禁じ煙草を絶ち皮相の道德は頗る華美なるが如し と雖彼等が眼中既に上帝の存在を確認せゞ神怒を實際に恐れざるが故に神教に托して獸慾を遂げ博愛に藉て他人を欺き不義非道言ふに忍びざるもの一にして足らざるは余輩の常に目擊する所なり彼れ熱心の信徒と稱せらるゝものにして尙ほ其の教義を以て犯罪の用に供し上帝を恐れざること如此況や之に及ばざるもの

に於てれや古人曰其本亂れて其末治まるものは未だ之れあらざと蓋し宇宙の眞理上帝の假面を剝奪し其の本源を破壞せしがゆゑに末流の信徒之を恐れざるは又深く異しむに足らざるなり而して彼等尚皮相に之を信じ虚偽に道德を飾るものは信徒本分の信仰教徒本分の道德にあらざして是惟不義の獸慾非道の野心を逞ふせんと欲する手段に供するに過ぎざるなり爰を以て其の歐洲にあるや常に奪國政畧の手段に使用せられ政畧と表裏呼應して其の名望を失はざるなゞ嗚呼奇なるかな耶蘇教の手段や昇天に起りて奪國に換用せられ道義に起りて非道に供せられ自ら進んで其の任に當り恬然とし

て愧ぢざるに至る是れ余が耶蘇教の手段は世を益するに足らざるのみならざ却て禍根を釀成するものとなす所以なり

第二節　佛教の手段

佛教の目的たる覺道の妙果は是れ無限の智慧と無限の慈悲とを以て充滿せるものなるが故に茲に到達するの道路豈亦道德の公義を履み善行の線路を歩せざして可ならんや然れば則はち佛果に到達せんと欲する旅行者は不知不識道德の美花を摘み善行の山水を眺めつゝあるものなること猶ほ農夫の米粟を收めんと欲して需めざして先其の稾草を獲るが如し其の所謂道德の美果善

行の山水とは何ぞや曰く佛陀の法輪を轉ずるや隨宜開導の方規にしるが故に善行道德の手段に至ても勝劣難易一にして足らざと雖大別して難易の二道をなすことを得べし古人曾て之を水陸の二道に譬說して曰陸路の歩行は則ち苦しく水路の乘船は則ち樂しきが如しと蓋し最終の目的は共に覺道の妙果に歸すると雖之を修するの機根千差萬別にして怯弱下劣の徒あり勇猛志幹の士あり而して其の勇猛志幹の者は能く陸路の艱難に堪ゑ行々山水の絶景を愛し天下の奇觀を賞して遂ゐ其の目的地ゐ達することを得るも怯弱下劣の者は水路の乘船にあらざんば到底茲に達する能はざるべし是れ難易の二道ある所以なり而して其の難行道は自ら陸路を歩行するが故に之を自力門と云ひ其の易行道は風帆溯船の力らによるが故に之を他力門と名く已下二道を畧說せん

第一段　難行道即自力門

勇猛敢爲の志士にして能く難に堪へ苦を忍び一切の善行無量の萬德を修得して自ら佛果を開悟するの道是れ即ち難行自力門なり其の困難なること恰も重擔を荷負して江山萬里の長途に登るが如し古人之を譬て三千大千世界を擧ぐるよりも重しと云へり下劣の吾人豈に企て及ぶ所ならんや其の所謂一切の善行無量の萬德とは

之を要するに布施持戒忍辱精神禪定智惠の六大行に歸するかゞ第一布施とは慳悋の志想を去て世の貧者を救ふを云ふなり之に三種あり曰く財施曰法施曰く無畏施是れかり其の財施とは有形の財産を貧者に施すを云ひ法施とは无形の眞理を説て惑者の迷情を破するを云ひ無畏施とは有形で無形とを問はゞ他人の恐怖を去て安樂の地位に立たしむるを云ふなり第二に持戒とは佛制の法律を嚴守するを云ふ其の法律は種類一にして足らゞと云ゑども要するに諸惡を排斥して諸善を修得するにあるなり第三忍辱とは百折屈せゞ千挫撓まざるの忍堪力を養成するの云ひなゞ第四精進とは拮据黽勉一点の倦怠を起さゞるを云ふなり第五禪定とは心猿意馬の發動を拑制して心を一定の方向ゑ專注するを云ふなり第六智惠とは之に二種あり一に實智では眞理の本體を徹觀するの智にして平等門の方なり二に權智とは萬象の相狀に就て正邪善惡を識別するの智にして差別門の方なり已上の六大修行は佛果に到達する難行道の手段なり而して此の六大修行の社會に及ぼす効果如何に至ては修行の本體一々宇宙の眞理に契當するものなるが故ゑ其の世を益すること余の贅言を待たゞして明らかなれば茲に此の陳述を畧すべし

第二段　易行道即他力門

機根昧劣にして難行六種の大行を修すること能ゝざ純ら彌陀報佛の願力に乘托して悲智圓滿の大果を開悟するの道是卽易行他力門なり而して其彌陀願力の何物たることは第二章の下に於て詳說したるが如く佛名を信受する一行を以て能く覺道ゐ到達するものなるが故に是を名て易行他力門と云ふなり熟吾人迷界の現狀を通觀するに耳目の見聞する所手足の感觸する所悉一ゞし て名利の汚境ならざるなく邪見の境遇ならざるなし此等濁惡蛇蝎の世界に住して六度の大行を修し幽玄高尙なる眞理の大陽を發見せんと欲するも言ふべくして行ふ能はざるが故に大悲の佛陀只に吾人の可憐を察し玆に易行易修の大法を成就して之を吾人に施與し玉へり而して其の大法は簡にして且つ易なゞと雖其の効德作用を分拆すれば千善萬德悉く此の中に含有せざるはなし爰を以て其の社會にあるや能く道德を維持し調和を助けざるこゞなし何となれば佛名信受の徒は現在の肉身にして既に悲智无限の佛心を領得したるものなるが故に胸裡寬大にして無信暴行の徒を見ること狂者瘋癲の如く啻ゐ敵視するに足らざるのみならず可憐に堪ゑざるを以て爭鬪起ることなく紛議生ずることなし若し夫れ社會の人類をして悉く如實なる佛教信徒たらしめば警察の必要戰時の軍器は固より之を要せざるなり所謂

堯舜の治黄金の世界とは蓋し佛教の盛時を指したるものと云ふも敢て過言にあらざるべし經に曰佛所遊履國邑丘聚靡不蒙化天下和順日月清明風雨以時災厲不起國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓と噫壯なるかな佛教の道德や文明開化の眞相茲に至て始めて得べきものなり

明治廿四年三月二日印刷
明治廿四年三月三日出版
（定價金貳拾五錢）

著作者　鎌田淵海
島根縣出雲國神門郡荒木村百番地平民

發行者　松田甚左衛門
京都市下京油小路通花屋町上ル西若松町三十四番戸

印刷者　西澤德次郎
大阪市東區道修町三丁目
いろは出版會社

版權所有

版權登錄

顯道書院新版發行書目廣告

御一代記聞書解

木板日本仕立淺黄名付本文入り

紙數八十五枚　全五冊ノ中　第一卷

宗教汎論

紙數四十五枚

佛教大意

第三卷　佛教ノ歴史（三月發行）

佛教大意

第四卷　佛教ノ歴史（三月發行）

發行所

京都市油小路通花屋町上ル西若松町三十四番地　顯道書院

京都市油小路通北小路上ル　興教書院

同　東中筋花屋町東入ル　永田長右衛門

同　御前通油小路西入ル　山内正次郎

同　東六條中珠數屋町　法藏館　西村七兵衛

同　東六條下珠數屋町　西村九郎右衛門

同　五條通高倉東入ル　澤田友五郎

同　三條通高倉東入ル　出雲寺文次郎

大阪市東區南本町四丁目　金尾爲七

東京日本橋區久松町一番地　開導書院

同　本郷六丁目五番地　哲學書院

大賣捌所

顯道書院新版發行書目廣告

蓮枝日野深依師題字　司教大洲鐵然師題辭　細學實行院僧朗師講述　輔教香川孫晃師訂正并序文

御一代記聞書略解

木板日本仕立總假名付本文入り

紙數八十五枚　全五册ノ中　第一卷

蓮如上人

近來我佛教上ニ關スル書籍續々出版アルト雖モ或ハ空論ニ渉リ理論ニ止リ未ダ我ガ眞宗内ニ於テ道德ヲ實踐躬行スルノ標準トナルヘキ書ノ乏キハ遺憾ナリシカコヽニ蓮如上人御一代記聞書ハ世ノ所謂嘉言善行錄ニテ然ルニ愚僧大師御一代ノ聞御實行在シマシタル言行ヲ記錄シ今日來代ノ道俗ノ爲ニ通俗ニ付キ鑑トナスヘキ書ナリ然ルニ此書ヲ古來ヨリ俗人ニモ解シ易ク深意ヲ問ヒ易キ來書ノ少キハ缺点ナリシニ此略解ハ嘗テ勸學實行院僧朗師カ大法主殿ノ命ヲ奉シ講述致サレタル講稿ナリ此度輔教香川孫晃師ニ訂正ヲ乞ヒ出版セシ所ナレハ苟モ宗内ノ僧俗諸君ハ一日モ座右ニ欽クヘカラサル良書ナレハ御望ミノ諸君續々御申越相成候ニ付キ不取敢第一卷近日製本出來候ニ付キ見本トシテ一卷ニ張リ正價拾五錢ト郵税四錢ニテ差上候間隆續御申越相成度候也

但シ現今出版中ノ處全國ヨリ望ミノ諸君

利井明敎師題字　寺松連城師序文　鎌田淵海師著述

宗教汎論

定價金廿五錢　郵税金四錢

本書ハ本派本願寺當大教校ニ於テ雄辯家ト精神家ヲ以テ其ノ名ヲ知ラレタル鎌田淵海氏ガ長キニ亦命ヲ奉シテ久シク東都ニ留學中五大法佛學校ノ一ナル東京法學院内ニ設立セル德友會ノ席ニ於テ昔年ノ無宗教社會ニ對シ講述セラレシモノニテ全編卷ヲ先生得意ノ雄辯ト達筆ヲ以テ國家ト人性ニ宗教ノ必要ナル事實並ニ其性質等普ク内外ノ學理ヨリ且實際ノ教義ニ渉リテ一刀兩斷ニ論明セラレシモノナレハ苟モ國家ト宗教ニ志アル諸君ハ必讀スヘキノ良書ナリ

寺松連城師題字　中西牛郎講述

佛教大意

第壹集　總論之部（二月發行）　定價五錢郵税二册迄二錢

中西牛郎講述

佛教大意

第三集　佛教ト諸宗教トノ比較（四月發行）

右ハ從來佛教專門的ノ古調ヲ施樂シ極メテ平易通俗ノ文章ヲ用ヒテ佛教ノ深遠ナル教理ヲ解說シタルモノナリ恰々タル小册子ニ過ギサレトモ其ノ妙ノ眞理ヲシテ諸者ニ滿足ノ了解ヲ與フルニ足ルノ良書ニシテ上ニ有スルカ如ク集ヲ分ケ部ヲ立テ毎月壹集ヲ發兌シ四集以下ハ部題確定ノ上發行ス

佛教大意

第貳集　佛教ノ歷史（三月發行）

發行所

京都市油小路通花屋町上ル西若松町三十四番地　顯道書院

京都市油小路通北小路上ル　與教書院

同　東中筋花屋町東入ル　永田長右衛門

同　御前通油小路西入ル　山内正次郎

同　東六條中珠數屋町　法寶館　西村七兵衛

同　東六條下珠數屋町　西村九郎右衛門

同　五條通高倉東入ル　澤田友五郎

同　三條通高倉東入ル　出雲寺文次郎

大阪市東區南本町四丁目　金尾爲七

東京日本橋區久松町一番地　開導書院

同　本郷六丁目五番地　哲學書院

少年佛教演說

壹冊定價金三錢
郵税三冊迄金貳錢

近頃ハ何國トナク佛教少年會ヲ設ケ少年諸氏互ニ智ヲ闡ハシ怠ヲ警ワ[illegible]ニ忘ラリレ[illegible]獨リ德育ニ至テハ未ダ之レニ適當ナル書籍モナク徒ラニ等閑ノ有様ニ打過セタリ當院ハ茲ニ見ル所アリテ佛教主義ヲ挾サミ給入ニシテ簡短ニ少年諸氏ノ了解シ得ル様ニナシタル而白キ小册子ヲ發兌セリ乞フ一本ヲ購フテ御覧

赤松連城師述

新年之古語

壹冊定價壹錢
郵税五厘

右ハ有志僧俗ノ方々ヒ申合セ本院ニ於テ蓮如上人正月一日ノ御法話ヲ赤松連城師ニ御請求ナ願ヒ合テ光德ノ正月一日御法話ト題シ宗内ノ信徒タル者ハ新年ノ禮書ニ代用シ并ニ寺院ヨリ信徒ニ勸スル年玉ニ致サル、筈メ印刷ニ付シタルモノナレバ佛語ノ吉語ナル所以ヲ了解シ得ベシ幸ニ一讀ヲ乞フ

一名巡教使安國清師著

通俗佛教對話

初篇 壹冊 郵税金八錢
貳篇 合 金貳錢

佛教ノ書數多アリト雖高尚深遠ニシテ局外者ノ輙ク解了スベキ者アルコトナシ此書ハ問答体ヲ以テ近便ニ簡單ニ平易ニ佛教三世因果ノ理ヲ說明ス初篇ハ今日上ノ事ニ寄テ因果ノ理ヲ說キ二篇ハ一世教ノ道理極成セサル所以ヲ詳論シ以テ三世因果ノ道理極成ナル眞理ナルコトヲ明セリイカナル破佛者モ此書ヲ一讀スレハ遂ニ佛門ニ入ルトコロノ最良書ナリ

利井明朗師題辭　足利義山師著述

眞宗俗問

壹冊定價六錢
郵税金貳錢

目次　神魂不滅　心念相續　禍福應報　應報不同　因果相狀　三世起源　涅槃分齋　修道難易
諸宗得道　心外無法　指方立相　生即無生　因果一果　他力自力　惡人正機　輕惡正善　服穢飲淨
神明敬畏　敬神祈成狀　木佛高僧
該書ハ世間ノ無宗教者ガ眞宗ノ教義ニ對シテ存セル所ノ種々ノ疑難ヲ解釋セシ者ニシテ問答廿一番ヲ以テ極テ簡短平易ニ其ノ局ニ結ヘリ四方ノ有志諸君請フ早ク一本ヲ購讀シタマヘ

司教赤松連城師題字　三師小山靈榮師著述

眞理ノ發揚

此編ノ要領ヲ聚レハ近世浮薄ノ惡風俗ヲ矯正シテ精醇ナル美德ヲ保持スルヲ期シ其精醇ナル美德ヲ持ツハ必ス佛教遵行ニ如クナキ理由ヲ說明セラレタル書ナレハ精モ我國國會開設ノ今日ニ當リ愛國護法ニ精神アル諸君ハ是非一讀スベキノ最モ良書ナリ

石山戰爭實記

代價八錢
郵税貳錢

全

神代洞通師編輯

諸々居士大内青巒先生序文

本書ハ石山ニ起リタル大戰爭ノ實記ナリ古來世ニ傳ハル軍記、傳說、ノ類頗多アリト雖モ概ネ口碑ニ依リ或ハ文飾ニ流レ其事實ニ相違スルモノアルヲ見ル依テ此度顯如上人三百回ノ忌辰ニ際シ該軍事ニ關スル記錄ヲ諸國有緣ノ地方ニ索メ以テ編輯シタル確實ノ良書ナリ幸ヒ法會ニ値遇セラル人々ハ當時干戈騷擾ノ世ニ在テ愛國扶宗ニ身命ヲ惜マズ力ヲ盡サレタル僧俗ノ勲功ヲ追想シ現今ノ世ニ處スル佛教信徒タルモノヽ執筆トシテ必讀ス可キ書也

三帖和讚略解

全三冊　定價金四十錢
郵税金六錢

本書ハ實成院御習師述ニシテ御和讚ヲ一首々々解セラレタル良書ニシテ僧俗ハ必讀スベキ良書ナリ

寶の林

毎月一回　一冊　定價金三錢
郵税金五厘

夫れ此節は日本全國至る所ろ宗教雜誌の發行あらざるはなし。然るに此寶の林は。更に他に比類ゐ迄。眞宗限りの雜誌にして。一種特別の性質を含み居れり。則ち部中を分ちて六段となす。一に無常部是は死ぬる事に氣の付かぬ人の爲なり。二に安心部是は極樂往生の樂しらるゝ人の爲なり。三に報謝部是は佛恩を忘るゝ人の爲なり。四に師德部是は善智識を知らざる人の爲なり。五に法度部是は人間の道を踏み外したる人の爲なり。六に雜錄部是は信心相續助緣の爲なり。此五つの爲より成立たる雜誌ゐれば。眞宗有緣の御僧侶方には。說教法話の材料となり。御同行方には。讚嘆談合のたねとなり。殊に讀み易く解し易くしてありますゆへ。とゐたも試みに一ト度はよみたまひ

25
404

施本適當書類

如上入丹ニ道西入道いろは歌

- 法のかたみ　一冊　定價一錢　郵稅二錢　一冊より八冊迄
- 家内相續　一冊　定價一錢　郵稅二錢　前ニ同ジ
- 報恩のかゞみ　附孝子勸引歌　一冊　定價一錢　郵稅二錢　前ニ同ジ
- 念佛行者十種の用心　一冊　定價貳錢　郵稅貳錢　三冊迄
- 法の近道　一冊　定價壹錢　郵稅貳錢　八冊迄
- 法のすゞ　定價壹錢　郵稅貳錢　八冊迄
- 安心ほとりたゝき　一冊　定價一錢五厘　郵稅貳錢　八冊迄
- 法の道しば　一冊　定價壹錢　郵稅貳錢　八冊迄

一本院出版ノ書籍ハ出版部職員ノ決議ヲ以テ出版セシ者ナレバ其佛教社會ニ於テ最モ必要ニシテ有益ナル事ハ一本院ノ書籍ヲ現金正札ニテ一切引中サヽ來候御申込ノ分モ前金ニ非ラザレバ御送附ニ及ビ難ク候ニ付何卒代金ト共ニ御申込相成度候也

一本院ノ書ハ施本目的品ニ候ヘバ百册以上ハ定價ヨリ相當ノ割引致しさし上可申候也追テ三百册以上御要ノ方ニ限リ前以テ施主人ノ御姓名通知相成候ハヾ末尾ヘ其旨記載仕候

一注意御送金ノ節ハ爲替ハ六條郵便局ニ限ル名宛ハ顯道書院會計部宛ニテ郵券代用ハ一割增シノ事ニ候也

36
404

404

013648-000-1

25-404

宗教汎論

名和〔旧姓鎌田〕淵海／著

M24

ABA-0117